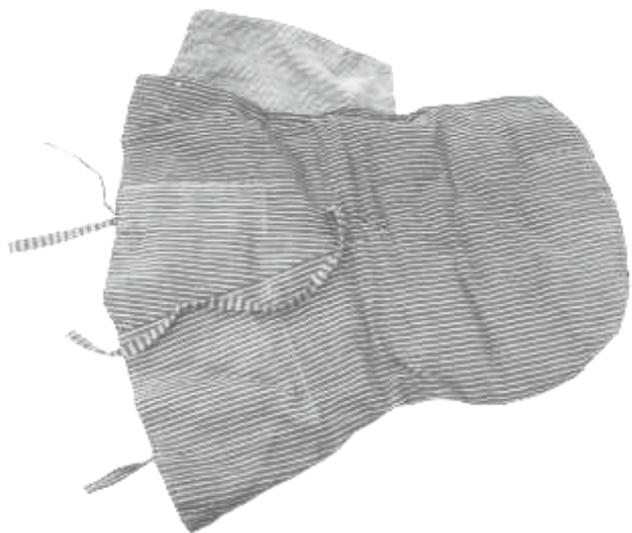
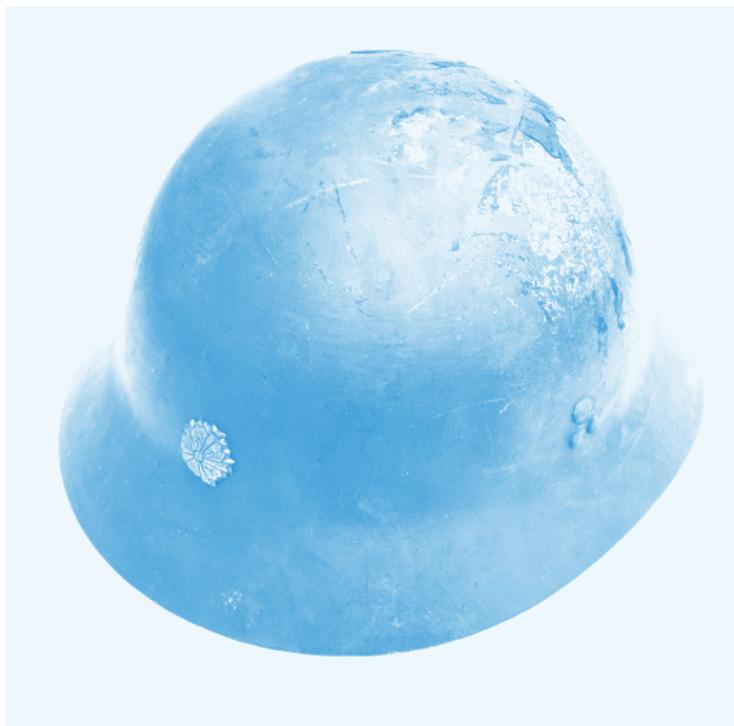


戦後七十年

未来に語り継ぐ私たちの体験

〜平和への祈り〜



戦後七十年

「未来に語り継ぐ私たちの体験」〜平和への祈り〜の発行に当たって

青梅市長 浜中 啓一

昭和二十年八月十五日の終戦から、七十年が経過しました。先の大戦において、日本では三百万人以上ともいわれる多くの尊い命が失われました。当時の日本の人口はおよそ七千二百万人であり、実に二十五人に一人が亡くなったことになりました。時が経つにつれ、戦争を体験された方々は減り、現在は人口の八割以上が戦後生まれとなっています。私達は、今ある平和が過去の多大な犠牲の上に築かれていることを改めて認識し、当時の体験を後世に伝え、戦争を二度と繰り返さないように努力しなくてはなりません。

世界に目を向けますと、今なお、紛争やテロなど、平和を脅かす行為は絶えず、多くの人達が悲惨な状況に置かれているのが現状です。

青梅市は、世界連邦平和都市宣言および非核平和都市宣言を行い、恒久平和を希求することを広く宣言しております。世界平和は人類共通の願いであります。この戦争体験集は、戦争を知らない世代にとって、平和な未来を築いていくためのヒントとなる貴重なメッセージです。

この冊子を発行するに当たり、多くの戦争体験者の皆様に御協力を頂きました。「勉強が出来なかった」、「食べることが無かった」、「家族を亡くした」など、当時の辛い記憶を辿り、後世のためにと御寄稿を頂いたことに心より感謝申し上げます。

発行に御協力くださいました皆様方のますますの御健勝、御発展をお祈り申し上げます、発行に当たっての挨拶といたします。

○寄稿



目

次



戦争末期を振り返って	新井 節子	6
勉強が出来なかった日々	岩波 禮子	8
女学生と戦争	加藤 セツ子	11
生死を分けたのは偶然	木村 好浩	14
第二次世界大戦と私	合田 和子	15
先の大戦の戦時中の庶民の生活	合田 速志	17
六歳児の大東亜戦争	佐藤 昌以	19
山中坂の悲劇	柴田 惇三	22
B 29 青梅に墜落	宿谷 一二	23
B 29 の空襲で焼け野原に	須田 喜八	26
中国での暮らし	田染 克代	29
東京大空襲を生き延びて	田中 久仁江	30
バム鉄道（第二シベリア鉄道）沿線強制労働体験	出口 四郎	33

寄稿



当時のクラス写真（佐藤昌以さん提供）

戦争末期を振り返って

新井節子



昭和十九年の春、当時私は高等科二年でした。「戦争に勝つまでは」の合言葉のもと、勤労奉仕の毎日で勉強どころではありませんでした。霞村の村有林（現在、立正佼成会道場所在地）まで行き、燃料にするための薪を束ねたものを幅広の紐で背負い、それを集めにくる荷車の通れる広い通りまで運びました。また、戦争で働き手を失った農家の草取り、茶摘み、芋掘りなどの手伝いにも行きました。そして、十月頃になると学徒動員により軍需工場で働くことになりました。毎朝七時頃に家を出て徒歩で新町（現在、誠明学園所在地）にあった富岡工学工場まで行きました。履物は、下駄や草履でしたので途中で鼻緒が切れ、

裸足で歩いたこともありました。そこでの仕事は、飛行機用のカメラレンズを磨く事でした。仕事中でも、警戒警報のサイレンが鳴り、それが空襲警報に変わると、私達はすぐに家に帰されました。帰宅途中B 29が爆音と共に頭上に飛んでくると、桑の木の陰や茶畑の中に隠れ、震えながら飛び去って行くのを待ちました。その時の事を思い出すと、今でも生きた心地がしません。

また、当時は食糧、衣類等も不足していました。弁当は、麦御飯なら上等で、さつまいもを入れたりしていました。太いさつまいもは供出してしましますので、残るのはやせ細りスジばかりの物で、おいしい物はありませんでした。衣類は、着物を解き、その布でモンペ等を作って着ていました。おしゃれなどとは程遠い物でした。

夜は、電灯に黒い布を掛け、明かりが外に漏れないようにして薄暗い部屋で過ごし、空襲警報が鳴り出すと、裏山の防空壕に

家族みんなで逃げ込みました。真っ暗で寒い壕の中では、肩を寄せ合い、敵機が飛び去るのをじっと待ちました。

このような日々を過ごすうちに春になり、卒業の時期を迎えました。卒業式は出来ず、学徒動員で通っていた工場の門前で、みんなでお別れをしました。工場に残って働く人、家の仕事を手伝う人、それぞれの道に進んで行きました。私は、家が農家であり、兄が兵隊として戦地に行っていたことから、家の手伝いをするのを余儀なくされました。その頃になると、村内にも軍隊が入ってきました。付近にある松の木の根を掘り、その根から油分を取り出し、燃料となる松根油を作るための部隊でした。また、その頃家にあった刀類や鍋、釜などの鉄類は全て供出しました。そして、三月十日の東京大空襲、当時新宿に嫁いでいた叔母も家を焼かれ。命からがら身一つで青梅の我家に戻ってきました。

夏になり、広島・長崎への原爆投下により、

一瞬のうちに多くの尊い命が失われたことをラジオ放送で知りました。

八月十五日、昼頃、近所の人みんなが集まり昭和天皇の玉音放送を聞きました。一緒に聞いていたものの、私には何のことか全く分かりませんでした。大人たちの「本当なんだろうか。」などのひそひそ声に続き、泣き出した様子を見て、戦争が終わった事が分かりました。子どもながらに、「これから先、どうなるのかな。」と不安になったことを今でも覚えております。

戦時下での生活を経験した者として、「戦争は、人間の命や平穏な日常生活を脅かすもの、二度としてはならないもの」という事を伝えたいと強く念じております。現在の平和のありがたき・幸せをかみしめながら。

勉強が出来なかつた日々

岩波禮子



私が学校に入学したのは昭和十六年です。尋常高等小学校から国民学校に変わった年でした。先生は軍隊あがりの恐い男の先生が多かったです。私が三年生、四年生になったときには男の先生はだんだん少なくなり、代用の女の先生が多くなって、毎日のように警戒警報と空襲警報で勉強するどころではありませんでした。

私が住んでいたところは、日立鉾山の社宅（現在の茨城県日立市）でした。通学道は山を下って二十分程のところになりましたが空襲警報が発令されても、なぜか爆撃はありませんでした。

日立製作所がある日立の町は昭和二十年七

月に、焼夷弾や艦砲射撃、一トン爆弾などの爆撃で無残な焼野原となってしまい、多くの犠牲者が出ました。

焼夷弾が落とされた夜、私は山の中にあつた防空壕の入口からその様子を茫然と見ていました。まるで火花が空一面に上がっているよう、真っ赤で不気味な明るさでした。

艦砲射撃があつた夜は、空襲警報が発令されてすぐに「ドドン」という響きがあつたので最初は雷かと思つていました。その音が何度も続いているうちに、父が「艦砲射撃だ。防空壕に逃げろ。」と言つたので私はいつも少しの食料と医薬品を詰め込んであるリュックサックを背負つて、山の中の防空壕に雨でびしょ濡れになりながら逃げました。夏なのに、恐ろしさのあまりガタガタと身体の震えが止まりませんでした。やがて夜が明け、爆撃の音も聞こえなくなったので家に戻りましたが、誰もが黙つたままでした。しばらくして両親が非常用に持ち歩いている炒つた大豆

を袋から出して食べ始め、私達姉弟も黙って食べ始めました。食べるものがなくなってきた頃だったので、ひと粒の大豆でも決して無駄にしませんでした。

それから何日かたって学童疎開が始まり、私は縁故疎開で、父に連れられて妹と二人福島県に近い山奥の小さな村に疎開しました。高萩という駅から山道を何時間も歩いて行きました。山道の途中に夏の花フシグロセンノウの花が、茜色をした花びらをゆるがせて咲いていて、私の心を癒してくれました。やっとな親戚の家に辿りついたときは父も私達姉妹も豆だらけの足になっていて、痛くて辛かった思い出があります。

村の分校に行く道は細い山道を約一時間歩いたところがありました。籠を背負って、鎌を持ち、草を刈りながら分校に行き、校庭に刈った草を並べて干します。この草は一体何に使うのだろうと子供の私には分からず、不思議に思っていました。終戦になってしばらく

くしてから、何かの燃料にするのだということを知り、何を聞かされて驚きました。

昭和二十年八月十五日の終戦の日は登校日だったので玉音放送を教室で聞きましたが、五年生の私にはよく分かりませんでした。校長先生から日本が戦争に負けたということを知り、これから私は一体どうなるのかと、不安な日々を過ごしていました。

何日か過ぎて母と兄が私達を迎えに来てくれました。家族はもう誰も生きていないと思っていたので、母と兄の姿を見たときには妹と二人で大声で泣きました。家族みんなが元気だということが分かり大声で嬉し泣きをしました。したが、三年生だった妹はずっと泣いていました。

鉾山の社宅に戻ってからは、ますます食料難でひどい思いをしました。学校が休みの日には父に買出しに連れられ、農家の庭先まで山道を二時間歩きました。父が下駄の台を作り、母が鼻緒を作った下駄を持って

食料の買出しに行くのですが、なかなか思うようにいきませんでした。ようやく手に入つたさつまいもやじゃがいもをはしごに結わえつけ、また二時間かけて歩いて帰り、家に着く頃には日が暮れて足が棒のようになっていました。九人家族の私の家では、こうして手に入れた芋類もすぐになくなってしまいました。

社宅の裏山には小さな畑をいくつも耕して、かぼちゃやフダンソウなどの野菜を作り、カジメと言う海藻を海に取りに行き、細かく刻んで麦の中に入れて炊き、お腹の足しにしたのでした。米の代わりにさつまいもや、カンパンが三度の食事なのです。学校でのお弁当はいつもさつまいもでした。私が中学生になってからも、生活に必要な物すべてが不足しており、学校に行っても勉強に集中できる生活では無かったのです。

その頃、父は捕虜達の炊事係になり、そのおかげで私たちはありがたいと思いました。大勢の捕虜達が鉾山で働かされていましたが、

終戦を機に立場が一変してしまいました。大きな釜で白いご飯を炊くと焦げが出るので、父は、焦げたご飯をもらって帰ってきて、そのご飯に少しの塩をふりかけて食べるのが、私達家族の唯一の御馳走でした。捕虜達がそれぞれの母国に帰国する時には、父は福岡の博多まで送っていき、涙の別れをしたのとことです。

日立鉾山が爆撃されなかったのは、大勢の捕虜達が働いていたからだという事をずっと後になって知りました。捕虜達が私達家族の命を救ってくれたのだと、感謝の念でいっぱいになりました。

世界中の人々が仲良く平和な地球でありたいと祈るばかりです。

私は山歩きが好きなので山を歩いてフシグロセンノウの花を見つける度、あの頃の辛かった日々を思い出します。あの時代の辛さはどう二度と繰り返されてはなりません。

女学生と戦争

加藤 セツ子



私は、昭和二十六年に青梅に嫁ぐまでは、八王子で生まれ育ちました。生家は織物業でした。昭和十二年七月の「支那事変勃発」は、小学二年生の時です。当時の日常生活は、まだ穏やかなものでした。しかし軍国教育は沢山受けました。子供ですから、それを素直に信じました。昭和十六年十二月八日「大東亜戦争」が始まり、そのころからじわりじわりと戦争の影が濃くなってきました。

女学生時代

昭和十七年、東京府立第四高等女学校に入學し、一く二年生のときは、ちゃんと勉強が出来ました。三年生になって間もなく「全国統一女学生の制服」というのが出来、強制的

に着用となりました。ズボンと上着の今でいう「グサイ」ものでした。第四高女の制服に愛着と誇りを持っていた乙女心が少々傷つきました。やがて「学徒勤労動員」となり、立川の軍需工場へ通い、兵器の部品を作りました。お国の為と思い、一生懸命働きました。

お昼休みに集まって「女学生愛唱歌」を合唱するのが、唯一の女学生らしい楽しみでした。そのうちに空襲警報が度々出る様になり、その度に防空壕に避難するのですが、壕の中では、平和だった時代の楽しい思い出、美味しかった食べ物の話等をして敵機が遠のくのを待ち、また工場で働く毎日でした。その工場もある夜、立川の空襲で全焼してしまいました。今度は女学校の講堂が「学校工場」となり、油まみれになりながら、旋盤で鉄砲の弾磨きをしました。でもこの学校工場も、やがて八王子の空襲で焼けてしまうのです。

八王子大空襲

戦争末期になると東京だけでなく地方の主

要都市が次々とB 29による空襲を受けました。アメリカはこういう戦略だったのででしょうか。空からビラをまいて、○月○日○市を空襲すると予告して、その通り実行しました。

二十年八月一日の夜から二日の未明にかけ、ビラのとおり八王子にも焼夷弾がたくさん落とされ、市街地はほぼ全焼しました。

この頃には、空襲警報が出たら、女や子供はすぐに郊外に逃げる。防火より命を守りなさいという事で、姉と妹と三人で逃げました。浅川橋を渡って、安全そうな林の中に座っていました。そこには、もう大勢の人が避難して集まっていました。空襲が止み、空が白みかけてくると、皆、市街地へ向かいぞろぞろと歩き始めます。父と兄とも会えましたが、家も工場も全焼し、蔵だけ焼け残っていました。蔵は高熱になっていて、開けると新鮮な空気が入りすぐ発火してしまつたため、自然に冷えるまで、数日間待たなければなりません。焼けた跡に呆然と立っていると、山梨の

叔父さんが近所の人と二人で駆けつけてきてくれました。中央線が高尾で止まってしまう、そこから歩いて来たそうです。茶碗、箸、米、その他生活必需品を沢山背負っていて、心強く、ありがたく、感謝感謝でした。

焼け残ったお店で柱やトタン板を調達し、蔵の壁にさしかけ小屋を造ってくれました。我が家では、祖父が老衰で寝たきりなので、母がついて、川口村の知り合いの農家に疎開していました。私と妹は、そこに行くことになり、バスの来ないバス通りを歩いて二時間程かかりましたので、母が心配して途中まで迎えに来ていました。

数日して蔵が無事に開き、荷物の間で五人雑魚寝した時は、ほっとしました。焼け跡でもなんでも、自分の家が一番良いのです。

終戦「焼跡で聞く玉音放送」

広島と長崎に原爆が落とされ、八月十五日、近くの警察の前に集まる様にと通達があり、近所の人みんな集まり、玉音放送を聞きま

した。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…」
その前後のお言葉は、よく聞こえなかったけれど、どうやら日本は負けたりしいと知り、とても複雑な気持ちになりました。

教育とは、いかに大切で、また恐ろしいものかをつくづく思いました。家が焼かれてもまだ、日本は勝つと思っていたのですから。終戦があと半月早ければ我が家は焼けないで済んだのです。とにかく、これからは人の言うことを、すぐに信じないで、まずは自分の頭で良く考える様にしようと思いました。

終戦後のこと

空襲の心配はなくなったけれど、家が無い、食料が無い、敗戦で国債は紙きれに、戦災保険金は大幅にけずられ、インフレ防止政策による「預金封鎖」で、自分のお金が銀行から引き出せず、父は大変でした。でも頑張っただけで、家を建て、疎開先から祖父を引きとり、工場も建て、仕事を再開しました。

女学校の授業も再開しましたが、校舎は焼

けてしまつて無いので、焼け残ったお寺の本堂を借りて、畳の上に座り、ひぎの上に教科書とノートを乗せ、足のしびれと闘いながら勉強したり、郊外で焼けなかった学校の空室や公会堂等を借りての授業でした。戦争とは失うこと多くして、良いことはひとつもありませんでした。

最近、忘れかけていた戦争中の事を思い出す様な言葉や、事象が多くなったような気がして、何やら不安になります。

子や孫達の世代が、私達のような思いをしないことを切に願っています。

生死を分けたのは偶然

木村好浩



東京大空襲の時は、深川に住んでいました。昭和二十年三月十日夜、米軍のB29爆撃機が低空を飛んでいるのに気づきました。二階の窓を開けると周囲の空が真っ赤になっており、空襲だと分かりました。疎開中の弟を除く家族五人のうち、母と妹は近くの小学校に避難し、父と私は東の方角に逃げました。兄は、祖母が住む浅草に向かいました。時間の記憶はありません。強風にあおられて何度も転びながら、川に飛び込み、板につかまり、炎に焼かれないようバケツで体に水をかけ続けました。夜が明けた町は、焼け野原になっていました。衣類が焼けた死体をあちこちで見ました。その後しばらくは、マネキン人形

を見ると焼けた死体に見えてしまい、とても嫌でした。一緒に逃げた父、母と妹も無事でした。残念ながら、祖母と兄は行方不明となり、遺体も見つかりませんでした。近所にある別の小学校では、真っ黒焦げの死体が次々トラックに積み込まれるのを見ました。四人が生き延びたのは運のおかげでしかないと感じました。

自動車部品販売業を営んでいた父の得意先がいた縁で、青梅市に転居しました。旧制中学生だった私も転校し、会社勤務を経て、青梅市役所に採用されました。

戦後三十年経って、母校の小学校を訪ねてみました。鉄筋の校舎は残っていましたが、同窓生約百六十人のうち、学校に連絡先を届けていたのは四人だけでした。空襲で亡くなったり、転居したりとさまざまな事情が推察されます。戦争がなければ皆がばらばらになる事はありませんでした。戦争は二度とあってはいけません。

第二次世界大戦と私

合 田 和 子



私は、昭和十二年六月七日、小石川植物園のある文京区で生まれ育ち、幼稚園に通い、昭和十九年に「文明開化」から名付けられた、日本でも古い明化国民学校に入学しました。父は、一枚の赤紙（召集令状）で戦地にいたため、幼い時に父と一緒に生活をした記憶はまったくありません。

一年生の一学期が終わった時、住んでいた家が、当時は国民学校の大きな建物の近くにあるという理由で取り壊される事になり、母の実家の和歌山県和歌山市に強制疎開をしました。

三人の叔父達は戦地におり、祖母、叔母、母、姉（十歳）、私（七歳）、弟（一歳）の六

人で女、子供の生活でした。母と叔母は、持っていた着物を担いで、田舎の方へ物々交換で食糧を買い出しに行きました。

昭和二十年七月九日、山梨県の風船部隊にいた父が、上官の「家族の様子を見て来る様に」との指令を受けて和歌山市に来ました。その夜、米軍は和歌山市を空から焼夷弾で攻撃して来ました。空襲警報のサイレンが鳴って庭の防空壕に避難していた私達は、入口の様子を見ていた父の「今、逃げないと危ない。」の一声で、壕を出て父の後について外に出ました。あちらこちらで火の手があがって、父は姉と私の手をしっかりと握って先に立ち、叔母は祖母の手を離さない様に、母は弟をおんぶして、火の粉を消す為に防火用水の水を防空頭巾の上からかぶって一生懸命走りました。祖母は何度も「私はもういいから、あなた達、早く逃げなさい。」と言いました。「おばあちゃん頑張って。」と励ましながら、火の中を父の誘導で一キロ先の和歌山城のお濠

まで逃げのびました。逃げてきた人たちは皆、お濠のそばの石垣にびったりと背中をつけて立っていました。私達も同様に息を殺して空襲が終るのを、恐ろしきで震えながら待ちました。天守閣にも焼夷弾が落ちて丸焼けとなりました。私達は全員無事でしたが、この空襲で多くの死者と負傷者が出て、和歌山市は焼野原となって大きな被害を受けました。

もし、父が来ていなかったら、おそらく生き延びる事は出来なかったでしょう。もしあの時死んでいたら、夫とも巡り会わず、大切な三人の子供達、可愛い五人の孫たちも誕生しなかった事になります。あの時を思い出すと命の大切さに涙が湧いてくるのです。

祖母と叔母は市街の知人の家でお世話になり、私達四人は父とともに山梨へ行き、富士吉田登山口の浅間神社前のお茶屋さんを借りて住む事になりました。

昭和二十年の八月十五日はものすごく暑い日で、朝からガラガラと太陽が照りつけ、神

社の木立では蝉が耳をつんざく程の声で鳴いていました。そして、この木立の中で父から日本がアメリカに敗れた事を告げられました。私は八歳の子供でしたが、深い意味は理解できませんでしたが、戦争が終って家族がずっと一緒に暮らせるのだという嬉しきでいっぱいでした。

戦争は、人間が引き起こす人間同志の戦いです。地球上では、世界各地で戦争やテロが相次いで起きていて、その為に多くの人々が悲しみと苦しみに直面しています。

世界中の人々が手をつないで、戦争のない平和な日々が過ごせます様にと心から祈っています。

和歌山大空襲

七月九日午後十一時五八分から

七月十日午前一時四八分まで

北太平洋 テニアン島よりB 29編隊で

焼夷弾八百トンを投下

死者千百一人、負傷者四千四百十八人

先の大戦の戦時中の庶民の生活

合 田 速 志



第二次世界大戦突入から四年目、昭和二十年になると戦況は一段と悪化し、米国爆撃機B 29が日本本土に飛来し、各地に爆弾を投下しました。

東京では、主に人口密集地帯の下町、台東区、墨田区が集中攻撃を受けました。

当時私は、山の手の東横線学芸大学駅近くの借家に住んでいましたが、空襲警報解除とともに防空壕から出て北の方角を見ると、空が真赤に染まっていました。この光景は今でも目に焼きついていきます。

次第に山の手にも危険が迫ってきました。軍の命令により、各自玄関先に防火用水桶を設置し、常に水を満たしておくこと、空襲警

報が鳴ったら、ただちに防空壕に避難すること、電燈の傘を黒い布で覆い、明かりが外部に漏れないようにすること等、厳しいお達しがありました。隣組の組長等数人が巡回をして、違反を見つけるとすごい勢いで怒鳴り込んできました。

物流は完全にストップし、各商店は閉鎖しました。銭湯はそれ以前に営業停止してしまいました。国から食料の配給があったのかどうかは覚えていません。

人々は食料確保に奔走しました。母はリュックサックに着物を詰めて、小田急線柿生駅近くの農家で、さつまいも、かぼちゃ等と交換してきましたり、父（軍関係の商社に勤めていて、かつ体が弱かったので兵役免除）は、軍に卸す菓子工場で、軍から入手した酒をドラム缶一杯の玉子パンと交換してきましたりして、どうにか飢えをしのいでいました。

当時はインフレがひどく、物々交換でしか品物は手に入りませんでした。食べ盛りの子

供四人（中学一年の兄、小学六年の私、妹二人）を抱え、両親は食料確保に苦勞したことを思います。

そうこうするうちに、家の近くに飛行機の部品を造っている町工場があり、そこが標的になり、類焼を防ぐ理由で、借家の取り壊しが始まりました。軍の命令による強制疎開で、私達も立ち退く事になりました。いずれは知り合いを頼って山形へ疎開する手筈になっていましたが、切符の入手や荷作りで一ヶ月先でした。行き場を失った私達は、無理を承知で世田谷の親類に身を寄せました。広くない六人家族の家に六人が押しかけることになり、世田谷で一ヶ月余りの生活は過酷なものでした。

この間、連夜空襲警報のサイレンが鳴り、防空壕に避難しました。目黒に居た時、大家さんに入れてもらった壕は、十人も入ると一杯という狭さでしたが、世田谷では共同壕で五十〜六十人入れる大きさでした。壕の中は、尿臭、便臭、それに何ヶ月も風呂に入ってい

ない人達の体臭が漂っていました。この臭いは今でも鼻に残っています。

私達にとって幸運だったことは、近くに爆弾が落ち、火の海の中を逃げ惑うという死の恐怖に一回も遭遇しなかったことです。一ヶ月余りの世田谷での生活に別れを告げ、慌ただしく東京を去りました。

途中の福島駅で空襲警報が鳴り、列車がストップし、一晚壕の中で過ごしましたが、無事山形県と秋田県の県境の日本海に面した小さな駅に到着しました。さすがにここまでは戦火の臭いは及んでいませんでした。

早速、村の共同風呂で半年余り溜まった体の垢を落とし、何年ぶりかの人間らしい食事をしました。

振り返ってみて、先の大戦で得たものは何もなく、日本国民ならびに日本本土は甚大な損害を被りました。戦後七十年が経ちますが、いまだに戦争の尾を引いていると感じます。戦争は二度と起こしてはなりません。

六歳児の大東亜戦争

佐藤昌以



私が豊島区西巢鴨から、父の生まれた西多摩郡西秋留村引田（現・あきる野市）に越してきたのは、昭和十九年の冬だったと思う。当時七歳の姉と五歳の私と三歳と一歳の妹を抱えていた父は、東京は焼け野原になるから落ち着いて仕事をしていられないということので早目の疎開だったと聞いている。息子さんが出征して一人住まいの女性の家に間借りした。隣が熊野神社で、出征する人の壮行会が行われた。寒い冬の朝、大勢の人の賑わいの中、山茶花の花の下で送られる人の沈んだ顔が忘れられない。私達は小旗を手に歌を歌いながら、西秋留駅（現・秋川駅）まで送った。帰り道は静かで皆黙って歩いた。その人は帰っ

て来なかった。

叔父も雨の日に出征した。まだ豊島区にいた頃で、南多摩郡川口村久保（現・八王子市上川口）の母の実家に見送りに行った。はじめて高下駄を買ってもらい、赤い着物で正装して、神社まで歩いた。明るく楽しい叔父は、いつもとは違った顔だった。叔母たちにあいさつに行くよう促されたが、いつもと違う叔父に近寄りがたかった。叔父の腰まで届かない私は叔父を見上げた。いつものやさしい顔で「お母ちゃんを大切にするんだよ。」と私の頭を撫でた。私はその意味が全く分からなかった。分かったのは大人になってからだだった。姉思いのやさしい叔父だったのだ。叔父は二十四歳でボルネオの地で戦死した。祖母は四角い箱が帰ってきて、カタカタと音がしたと母に話していた。戦争がなければ九十四歳だ。昭和二十年四月に西秋留国民小学校へ入学した。男組と女組のニクラスだった。授業中でも、空襲警報が鳴ると授業は中止され、道

端のお茶の木の陰に隠れながら耳を澄ませて帰った。間借りしていた家に、息子さんが急に帰ってくることになったため、父の実家の隠居所に移った。隣が元医者だった広い屋敷に学童疎開が来た。入浴は隣組で何日かおきに分けてしていた。

ある日、空襲警報なのに、何人かの子供が防空壕にも家の中にも隠れず遊んでおり、機銃操射がされた。突然のものすごい爆音に、姉妹四人部屋の真ん中で母にしがみついた。その爆撃で何人かの子供が亡くなった。その母親の一人が「こんなことになるのだったらそばに置いておけばよかった。」と、縁側に座って泣いていた。それから東京の外れの西多摩も空襲が激しくなり、夜は暗い電球に黒い布をまき、灯が漏れないようにして息をひそめていた。

迫り来るB29の不気味な音は、戦争が終わった後も夢を見て恐かった。今のイオンモールの辺りだろうか、一面の畑が広がっていて、

村の人はあきるっ原と言っていた。そこにアメリカ兵が黒焦げになって亡くなっており、人々が棒を持って殴りにいっているという。私は遠い異国で一人亡くなった兵隊さんが可哀想で泣いた。母は「お父さんは行かないんだからいいでしょう。」と言った。父は東京都交通局に努めていて、たまにしか帰らなかった。私達は毎日むなぎ坂を登って父を迎えに行った。そこから病院前駅（現・武蔵引田駅）まで遮るものは無く、一面の畑だった。一日に何本も無い汽車から降りて来る人はわずかで、そこから父を確認できた。「今日もお父さんは来なかった。」と言うと、母は「お父さんはもう駄目かもしれない。」と言った。八王子の空襲の時も南の暗い空に真っ赤な炎が激しく燃え、私達は震えて見っていた。

そして昭和二十年八月十五日が来た。その日は雲一つない青空で暑い日だった。空襲警報が無いという事で子供達は喜んで水浴びに行っていたが、私は体が丈夫でなかったので行け

なかった。重大放送があるという事で午後大人達は、ラジオの音の良い家に集まった。私は一歳の妹と家にいた。村は静かで蝉の鳴き声だけが烈しかった。私は妹をおぶってその家へ行った。白壁の蔵が強い太陽の光に反射して倒れそうだった事を覚えている。家の中は静かで、隙間から覗くと大人達は皆うなだれて正座していた。すると低く重厚な声が聞こえた。それが玉音放送だった。全く意味が分からなかった。女の人達は皆白い割烹着姿で出てきた。母にどうしたのか聞くと、「もう空襲警報はなくなつたよ。」と言った。私は飛びあがりたい気持ちで嬉しかった。皆、黙って帰って行った。男の人が出てこないので見に行くと、皆泣いていた。私は大人の男の人が泣くということがショックで、訳が分からなかった。

その日から十三日後の八月二十八日、おぶっていた妹が疫痢であつという間に亡くなった。伝染病で亡くなった人は病院前駅と西秋留駅

の間の畑の中の焼場で焼かれた。妹の白い煙が力なく青い空に登って小さな骨になってしまった。二歳足らずの戦争だけの命だった。母はその後、妹の着物を見て毎日泣いていた。私にはそれがたまらなかった。

戦争は終わったが、食べるものがなく、三度の食事のままならなかった。川に泳ぎに行った時、開墾した畑のさつまいもを川の水で洗って食べた。おやつなど全くなかった。ララ物資という衣料の配給やらがあつた。毛じらみに悩まされたが、私達は空襲がないこと、川があり山があり花が咲くこと、それだけで楽しかった。大人の苦しみは分からなかったが、その人達が今の日本の繁栄の基礎を築き、私達はそのベルトコンベアに乗ってきたように思う。

こうして記憶を掘り起こすと戦争で亡くなった数多くの人達や、苦勞して生き抜いてきた人達に対して、改めて手を合わせずにはいられない。

山中坂の悲劇

柴田 惇三



昭和二十年当時、私は立川に住んでいて、昭和第一工業に通っていましたが、学徒動員により、昭和飛行機立川飛行場で作業をしていました。その頃は連日のようにB29が飛来していました。また、空母から飛び立ったグラマンが東京方面や日本全国に飛来し、低空飛行で機銃掃射を繰り返していました。

山中坂というところには、立川市指定の横穴式の防空壕がありました。昭和二十年四月四日、空襲警報が発令され、約四十人がこの防空壕に避難しました。防空壕に向かう人の動きが上空から見つかってしまったのか、この防空壕の所在地がグラマンに発見され、敵襲を受けてしまいました。防空壕は崩壊し、

中にいた人たちは生き埋めとなり、亡くなってしまいました。私は翌日、むしろが敷かれた上に、亡くなった人たちが並べられているのを見ました。口の中が泥まみれになり、また、苦しみの中必死に土をかきわけたためでしょうが、爪が無くなっている遺体が目立ちました。

現在、山中坂には慰霊の碑が建立されています。



山中坂の翌日襲敵

B 29 青梅に墜落

宿 谷 一 二



戦争末期になると食料が底をつき始め、国民も兵士も食料難に陥りました。ある晩、裏木戸を叩く音がするので、母親が戸を開けると、小学校の教室に避難疎開していた兵士が立っており、小さい声で話しかけてきました。母親の話によると、今日はろくな物を食べていないのでなんでもいいから恵んでほしいとのことでした。母親は同情し、頑張ってください。」と言って、さつまいも二本を手渡しました。帰り際に兵士が「このことは絶対言ってはくれないでください。もし分かると重営倉にぶち込まれてしまいますから。」と言い残していきました。兵隊が食糧に喘ぐような状態と、竹槍で戦わせる指揮官ではこの戦争も終りだと思いました。まさに「腹

が減っては軍が出来ず」です。

この頃、出征した長兄が夜中に突然現れ、家中が大騒ぎになりました。腹が減っているので米の飯を食べたいとのこと、母親は急いで米を研いで炊きました。話によると、兄は青梅の小学校に避難疎開として来たのです。出征した時は国土防衛のため陸軍甲府東部六十三部隊砲兵隊で軍馬を使っていました。「日本は負けるので軍馬とコーリヤン一俵を貰える。」と言い、親は、とんでもない、それは乞食が馬を貰うのと同じことだと話を返しました。青梅の小学校から月の明かりを頼りに天寧寺の山を来たとのこと。青梅の小学校に兵隊が避難しているとの話は聞いていましたが、まさか兄が避難しているとは思いませんでした。昼間は馬の手入れ、夜はアメリカのデマ宣伝放送を毎晩聞いていたために、戦意を喪失していました。見つかる大変なことになるということで、そそくさと帰って行きました。

戦争末期の二月、姉と二人で、八坂神社の裏山の畑で草取りをしていました。パチパチパチと後方から音がしたので振り返って見ると、山の木葉に機銃掃射の玉が当たった音でした。ダダダダーと爆音と同時にオレンジ色のP51戦闘機が突然現れ、伏せることもできませんでした。地響きを残り飛び去った数メートル離れた所の畑に点々と穴ができており、恐ろしい思いをしました。おそらくその戦闘機が東青梅駅に停車中の電車を狙って銃撃を加えたのでしよう、乗客の一人であった高等女学校の生徒が犠牲になりました。

四月二十四日、B29が二俣尾平溝に爆弾一個を投下し、五人の犠牲者が出ました。小内ダム水源堰堤への爆撃がなかったことは不幸中の幸いであり、下流の発電所や自治体は胸をなでおろしました。

昭和二十年四月一日から二日にかけて、テニアン島西飛行場からB29爆撃機百十五機が中島飛行機製作所に対して九回目となる爆撃を

実施しました。そのうち一機が迎撃の高射砲で被弾し、エンジン二基が停止し、八王子上空で陸軍飛行第五十戦隊中垣秋男軍曹操縦の二式複座戦闘機「屠龍」の追撃を受けて、炎上したまま青梅町の上空を通過し、柚木村の山林に墜落しました。六人の搭乗員が落下傘で柚木、二俣尾、黒沢などに降下しました。搭乗員十一名のうち五名は機体と共に焼死しました。二俣尾では五人を逮捕しました。黒沢にも降下したとの情報で大勢の人が山狩りをしましたが、見つからず諦めて帰りました。

約二週間、沢蟹などを採って食べていたようですが、空腹に耐えられず「銃」と食べ物と交換してほしいと、黒沢部落の奥一軒家の原島さんの所にペーターソン・ケネス軍曹が現れました。大変な騒ぎとなり、お前等のために俺達は苦しめられたとばかり：駐在所に連れてくるまで：この先は言えないです。すぐにケネス軍曹は青梅警察に連行され、警察署で一泊しました。駐在所近くの授産所の前

庭に、墜落したB 29搭乗員の備品が展示してあったので見ると、落下傘をはじめ、ゴムボート、ガム、チョコレート、保存食も少しあったので、空腹で絶えられなかったとは思議に思いました。

ケネス軍曹は福生憲兵分権隊・立川憲兵隊經由で東部憲兵隊司令部に送られました。五月二十五日に転監先の東京陸軍刑務所が空爆に遭い、ケネス軍曹は焼死しました。四月二十五日に東部俘虜収容所本所に収容されていた四名は戦後帰国しました。

敗戦の翌日、部落の人達が福昌寺に集まり会合しました。女の子は連れていかれ暴行される、男の子は殺される、今のうち白い米を食べておきたいと、みんな真剣な表情でした。

終戦後、墜落したB 29搭乗員の調査にMP（アメリカの憲兵）が来て、駐在所の巡査が取り調べに連れて行かれました。終戦後二週間位だったと思いますが、誰かが大声で「アメリカが来たぞー！」と自転車のペダルを漕

いで飛んできました。遊んでいる子供たちが私の家へ飛び込んで来ました。裸でいると銃で撃たれると、母親は急いでダンスからシャツを引っ張り出して着せました。アメリカのジープが徐行しながら、前のフェンダー部と後部にそれぞれ左右、私たちの方に銃口を向け、引き金の所に手をかけ、いつでも撃てる構えで座っていました。初めて見るアメリカ人は「ずいぶんでかいやつらだ」と思いました。私達は、大人から部落の会合の話を聞いていたので、これで私の命はおしまいだと思えました。全員が道路にひれ伏して銃殺を覚悟し、南無阿弥陀仏と唱えながら、何事もなく早く通り過ぎないものかと祈りました。ジープはキーンと音を立ててゆっくり来ました。恐ろしさのあまり、体がぶるぶる震えだし、通過したことに気がつきませんでした。当時を振り返ると、もう食べるものが無く、蛙を捕まえたりしていました。とにかくあの時分はひどかったです。

B 29 の空襲で焼け野原に

須田 喜八



父親が昭和十年五月に亡くなり、昭和十三年に、青梅町仲町から姉の嫁ぎ先の渋谷区幡ヶ谷本町に移転し、そこで戦火に遭いました。

当時の我が家は、母五十五歳、姉三十五歳、姉の子供が三人いて八歳、五歳、二歳（いずれも女性）、それに私十九歳の六人でした。姉の夫は、前年の昭和十九年に召集されて、戦死の公報が来たばかりでした。三十九歳でした。

我が家の近くに、近々小学校となる予定の仮校庭広場があり、この空き地の東側が高さ五十メートル程のほぼ垂直に近い巨大な壁面で、この中央付近に、大きな防空壕を並べて二つ掘っていました。百人位収容できたと

思います。

昭和二十年五月二十三日の夕刻近く、空襲警報のサイレンが鳴り出したので家の前に出ると、西の方向、中野区あたりの空から、B 29と思われる爆撃機数十機の轟音が聞こえてくると同時に、暗くなりかかっていた空が極度に明るく輝いて見えてきました。「大変だ！空襲だ！早く防空壕へ！」と、大声で家族に向かって怒鳴りました。

家族が防空壕に入って間もなく、焼夷弾が落下し、家の前のアスファルト道路に突きささり、火を噴きだしました。私は防火用水の水を焼夷弾にかけました。焼夷弾は長四角で、油脂とエレクトロンと二種類あるときいていましたので、花火のように火が噴き出す状況から、後者と思いました。

そのうちに多数の焼夷弾が落ちてきて、消火作業をしたものと思いますが、近隣の人々との接触、あるいは共同で作業をしたなどの記憶はありません。焼夷弾は次々と投下され、

各家が炎上。とても手に負えない状況となつて、防空壕に逃げ込むつもりで行動したものとあります。

気がつくとは私は、仮校庭広場の南側で、西を頭に横になっていました。時刻は午前四時半頃だったかと思えます。黒い煙が地上全体を覆っていて、呼吸のできるのは、地表三十センチ位ではなかったでしょうか。帽子、勤務していた大崎郵便局の事務服を身につけており、上衣は、七、八カ所焼け焦げた跡がありました。体が、怪我はありませんでした。やがて、夜明けとともに見通しが利くようになってきました。立ち上がって東側の壁面を背にして、三方をゆっくり見通しましたがそれまであった建物等が全く見え、何も無い大きな広場となっていました。近くを流れる小さな川に架かる白い橋とコンクリートの手すりは良く見えました。遙か遠くは、湾曲した堤防のような感じに映り、見渡す限り完全に燃えつくされ、二カ月前の浅草を思い出し

ました。

実は、三月九日の夜に浅草が最初の空襲を受け、私は三月十五日に電話線の回収担当で出向を命じられて浅草に行きました。平坦な浅草は完全消失で、とても見通しが良かったのを思い出しました。言問橋から西側一帯での作業で、昼休みに言問橋に行ったところ、広い隅田川に幾重にも山のように折り重なった水死体が浮かんでいました。大空襲で逃げ場を求め、橋の双方から対岸を目指すも、行き場がなく高さ三十メートル位ありそうな川に飛び降りざるを得なかったのでしょうか。小舟に乗った数人が、竿で一人ずつ死体を吊り上げ、引き取る人の有無を両河岸の大勢の人に見てもらっていました・・・。

一方、仮校庭広場には私一人だけでなく、横になっっている人達が何人か見えてきました。そのうちに、汚れた空気も徐々に薄れてきて、立って歩けるようになったので、南側の位置から北側に歩いてみました。

学生らしい人達が、どの人も頭を西に足を東の方向にして倒れています。その間隔は、四、五メートル位でしょう。皮靴らしいものを履いており、皮膚に焼けた跡はありませんが、髪の毛が無く、靴以外身に付けたものは無く、丸裸です。九人か十人位だったと思いました。

防空壕が開くのを近くで待っていました。やがて数人のあとから母が出てきて、私の生きていたのを見て、抱き合ってお互いに泣きました。三人の子供達も無事に、姉と一緒に壕から出てきました。姉も同様に涙を流して喜んでくれました。

この仮校庭広場は、この辺一帯の人家の土地よりも、一メートル位高くなっています。仮校庭広場のはずれの傾斜部分に、二畳分位の面積の、我が家の荷物用防空壕が作ってありました。この防空壕を早速見てみました。トタン板を張ったしっかりした蓋にしていたおかげか、焼けもせず、特に中里介山の「大菩薩峠」の十五冊位が、そのまま収まってい

たのには驚き感謝しました。

仮校庭広場の東にある高台から京王線初台駅まではすべてが平坦な住宅地です。後で知りましたが、この一帯は各家とも、庭に掘ってあった防空壕に避難したそうですが、皆さん壕の中で焼死してしまったそうです。なぜ私は生き残れたのか、神様に深く深く感謝しております。

中国での暮らし

田 染 克 代



中国では、暑い夏であっても建物の陰に身を寄せると涼感が得られて嬉しかったことを覚えていきます。日本人も器用ですが、姑娘（クワンヤン）と呼ばれる中国の未婚の女性は、全部手作りの絹の靴を履いていました。姑娘さんの所に遊びに行くと、私をいとおしく思ってくわいがってくれました。

男性の靴は、冬用は綿を入れることで、足を暖かくしました。下校の時、いつもと違う道を通ったときに小屋を見つけ、ちよつと丘を上りその小屋をのぞいてみると、中国の男性が遺体となって寝ていました。足元の靴が破れ、中の綿が出てしまっていることから、貧しい人だと分かり、気味悪さはなく、ただ、

可哀想だと思いました。

北京では街の中にお店がいっぱいありました。中華レストランでは京劇の画が入ったナプキンが置いてあり、私は使わずに持って帰って大切にしました。輪投げをして、ガラスで作ったお箸などを狙って遊びましたが、なかなか手に出来ませんでした。

北京で玉音放送を聞きましたが、大人達が何故泣くのか、子どもの私には分かりませんでした。全財産を置いて北京から引き揚げ、帰国した日本は、何もない敗戦国でした。東京は丸焼けとなり、火事に巻き込まれ、隅田川に飛び込み、大勢の方が無くなりました。私は、内地がこの様なことになっているとは知りませんでした。知り合った方からは、ネズミまで食べたと聞き、とても驚きました。人を狂わせ、相手を殺すのが平気になり、お互いにむごいことをするのが戦争です。人間らしく、国を問わず美しい物を伝えていき、争いのない幸せな世界であることを望みます。

東京大空襲を生き延びて

田 中 久仁江



昭和八年、父松永栄二十九才、母サト二十八才、姉薫二才は、佐賀県から上京しました。就職難の時代でしたが、ようやく軍需工場吾妻鉄工所に就職出来ました。父は眼を怪我したり手を怪我したりしたので、兵役は行けなかったようです。母も上京後、喘息になり病身になりました。

昭和十四年十二月十五日、私は、陸軍城東病院で生まれました。その頃は江戸川区小松川の下町に住んでいました。母は出産後に視力が低下したため、姉が常に手伝う日々でした。また、私は生まれて間もなく「一万人に一人」と医者と言われる大病にかかり、母は私を抱いて毎日のように通院し、巣鴨のお地

蔵さんにお参りしたことで、なんとか私は九死に一生を得ました。

昭和十八年、弟が生まれ、父は、自分の名前を一字取り「栄治」と名付けて喜びました。この頃、私は幼稚園に入ったのですが、毎日のように警防団のおじさんがメガホンを持って「空襲警報発令」と町内を走り廻ると、幼稚園から走って自宅に帰ります。そのため幼稚園に行くことを嫌がったそうです。

昭和二十年、姉は高等科二年、私は五才、弟は一才、父は工場長で工場を守る事が多くなりました。

三月十日未明、空襲が始まりました。私はその年の七五三のお祝いに履く予定のポックリをはいて逃げました。けれどすぐにめげてしまつて母に背負われて、姉は弟を背負つてミルクとおむつをしっかりと抱えて逃げました。周りが火の海です。防空壕はもう満員で入れません。父が母に「逃げる時迷ったらお巡りさんにきくように」と言ったそうです。母

は逃げながらお巡りさんを探し、どちらに逃げたらよいかを聞いたところ、燃え盛る火の方を指さして、そちらに逃げるように言われ、猛火をくぐって逃げました。そして小松川橋の中洲にたどりつきました。火のない方へ逃げた人は、後ろや周りから火に囲まれてしまい、全員が亡くなったそうです。川の中も川岸も死体ばかりの中で私達は夜を明かしました。三月の寒さは厳しく、裸足の私の足を母はおむつでくるんでくれました。朝になり、幸いにも姉の友達の川向こうの家が残っていたので、そこで弟にミルクを飲ませたりおむつを取り替えたり一息つけました。その後、避難場所の小学校に行きました。そこでようやく、おむすびを一つずつ頂きました。父も工場が全焼してしまって、私達を探していました。翌十一日の夕方、父と会う事が出来ました。お互い怪我もなく本当に良かったと思います。何もかも灰になってしまい、着のみ着のまま、弟も小さいので、父の友人

である望月さんを頼って西多摩郡福生町に疎開することになりました。望月さんも疎開していたので弟夫婦の家を紹介してくれて、志茂にお世話になることになりました。家主は小河内出身の山下酒店で大変お世話になりました。すぐそばに憲兵隊があり、憲兵さん用の借家が何軒ありました。親戚もなく物もない私達は、食べ物が無く、農家の手伝いをしたり、つみ草をして何とか暮らしていました。昭和二十年八月十四日、弟栄治は栄養失調と消化不良で亡くなりました。その頃は医者も出兵していて、薬も何もありませんでした。翌十五日、弟と別れる時、母は、甘いくず湯を亡くなった弟の口に入れてあげ、私に残りをくれました。こんなに甘いおいしい物があつたのかと忘れられない思い出です。その時玉音放送があつたそうです。父は弟を小さな木の箱に納めて西多摩郡瑞穂町にある火葬場に行きました。薪がないと火葬してくれないということ、友人が薪を探してきてくれ

て、父は自転車の後ろに弟を乗せ、友人は薪を乗せて瑞穂町に行きました。けれどすぐに火葬することは駄目だということで、父は泣く泣く弟を火葬場に置いてきたそうです。

昭和二十一年四月、私は福生町立第一小学校に入学しました。わんぱく盛りの子供達は私の机の上に乗ったり、今と違っていたじめで私はなかなか学校に馴染めませんでした。母は家の前を通る上級生に私を託して学校に行かせました。戦時の体験はいつまでも私をとらえて、いつも精神的に落ち着かず、ビクビクした生活が何年も続きました。

中学生の時、防犯をテーマにした作文を応募した時に三位に選ばれました。内容は戦争をなくすことが大事ですと書きました。

戦後七十年の現在、父母も亡くなり姉に聞きながらこの文を書きました。間違いも多くあると思いますがご理解ください。

青梅の田中家に嫁いで五十年、五人の子供と十三人の孫に恵まれ、平和な日々を過ごし

ています。改めて両親の苦勞がどんなに大変だったか偲ばれて、熱い思いがこみ上げます。そして、この平和が永久に続くようにと祈る毎日です。私達が経験したような思いは誰にも二度と味あわせたくありません。



弟の栄治さん

バム鉄道（第二シベリア鉄道）沿線
強制労働体験

出口 四郎



昭和二十年十月、牡丹江から貨車でスイフ
ンガを経由して北上し、ハバロフスク、チタ、
イルクーツクを経て十一月九日にタイシエト
第十収容所に入所しました。この間、昼夜走
り続けて十六日間を要しました。精神的苦痛、
運動不足、栄養失調等が重なり、急性肺炎に
なって生死を彷徨い、入院しました。その後、
十二月三十一日の夜間、雪の中強制的に退院
させられて、収容所まで四キロの道のりを、
同僚に支えられながら歩行し、悲惨な思いを
したことが脳裏に焼き付いています。
バム鉄道は、第二シベリア鉄道とも称して、
タイシエトを起点として北緯五十五度以北を

走り、バイカル湖北側からサハリンの太平洋
側まで至る四千三百キロの鉄道です。タイシ
エトから三百五十キロのブラーツク間を日
本将兵の強制労働により、私もその一人とし
て、タイガを伐採して道路をつくり、鉄道を
敷設しました。満足な住居もなく、厳寒での
強制労働のため、枕木の本数におよぶ死者が
出たといわれます。犠牲者の多い地域の死者
はほとんど未収骨であり、このまま風化させ
てはならないと思います。

この作業で、ダンプカーから運ばれてくる
土砂の中から、日本の赤مامシより二〜三倍
大きいシベリアの黒مامシが出てきます。こ
れを我先にと捕獲に走り、捕った者に権利が
与えられます。ある日、私が捕ったمامシが
大きな腹をしていたので、ネズミかカエルで
も飲んでいるのかと思い、腹から皮をむいて
いくと、薄い膜の中に小指ほどのمامシの赤
ちゃんがいきました。小枝で膜を破り、飯盒で
受けて取り出すと十四匹いました。これに蓋

をし、蒸し焼きにして同僚と分けて食べました。マムシの親は焼いて食べました。味は魚と同じでかまの部分がおいしかったです。多い時で、ひと月に四匹食べました。

夏季は日中三十度くらいになり、白夜で夜中でも真っ暗にはなりません。冬季は逆に日の出が午前十時、日没が午後二時半で、すぐに暗くなります。冬のある日、同僚が屋外にある便所から帰ってきて今日は暖かいと言うので気温を聞いてみると、零下四十度と言いました。毎日零下四十五度なので、零下四十九度を暖かく感じるのです。私がいた四年間では零下五十九度を二度体験しました。

バム鉄道の沿線にある製材所で悲惨な事故を目撃しました。直径一メートルほどの電動丸鋸の上に、同僚が仰向けに倒れ、丸鋸の傍に耳、三メートルのところ右腕、六メートル先の積木のところに頭が飛ばされ、もちろん即死でした。彼はその日、病気の同僚の代わりに慣れない作業に就いていたのです。

また、冬季の伐採で逃げ遅れ、倒木や枝の落下で多くの人が犠牲になりました。作業は三人一組で、道具は二人引きの長鋸一丁、長柄付きの斧一丁だけでした。幹回り七十五センチ以上、高さ三十五メートルのエゾ松やカラ松を、一日八本伐採して枝を払い、指示された通り八メートル、六メートル、三メートル等に玉切りにします。冬場は雪のため、足場が悪く逃げ遅れる危険がありました。夏場は蚊とブヨに悩まされました。

これらの作業中にハプニングがありました。作業中、私が休憩をしていると、監督が来てサボタージュしているとクレームを付けてきたので、喧嘩となり、自分を省みず殴り合いをし、連行されて収容所の留置場に三週間留置されました。敗戦国の人間が戦勝国の人間に無謀なことをして、もうこれで日本に帰れないとその時思ったことを思い出します。それから、ロシア人と争ったことで収容所内の皆から一目置かれる様になりました。

収容所は旧軍隊の中隊編成に似ており、四寮で編成され、一寮に二百〜二百五十名収容されていました。私は第二寮の寮長として、ソ連から指示された作業の割振りをして留守番役も務めていました。ある日、ソ連の軍医中尉で二十五歳位の女性が来て、便所掃除の作業を申し付けました。残留者は病人だけだからだめだと言うと、軍医は、お前がいるのではないかと言いました。スコップを持って便所に行き、床上の氷を削り取って掃除をして帰って来ると、その軍医が来て私を呼びつけ、掃除をしていないではないかと私に強く叱りつけて来ました。一緒に便所に行って説明すると、便槽（糞、小便の氷柱）を取り除くために中に入って作業しろということでした。ツルハシとスコップを持って便所の底に降り、五十〜六十センチ直系の大・小便の柱を掘り倒すのですが、小さい氷片が体の首筋や顔面、服のヒダやシワに入り、それが溶けた時はどうしようもありませんでした。

この女性軍医が身体検査をするのですが、全員を丸裸にして前から全身を眺めて胸のあたりの筋肉を左右つまみ、その後、後ろ向きにして同じく左右の尻の肉をつまんで筋肉の付き具合をみて四段階に分別します。ちなみに私は二十年十一月から二十一年五月までは四級で、その後帰国するまでは一級でした。この様に、衣も食も住も満足に与えられず、零下五十度におよぶタイガの伐採で始まり、このバム鉄道建設が進められたタイシエト地方で、五〜六万人が血と汗を流した事実を歴史上消せません。この日本人の人力が無ければ、急テンポの開発は出来なかったと自負しています。鉄道建設の他、国营集団農場の燕麦の収穫・乾燥圧縮作業、パン工場、貨車の荷物の積み下ろし、その他多岐にわたり重労働を課せられました。以上、四年間の抑留体験の一端を記します。

平成四年六月に、イルクーツク、タイシエト、ブラーツク間の墓参りに訪露しました。

最初の記憶

藤 堂 夏 生



満三歳の誕生日の五日後、終戦になりました。もちろんその日の記憶はありません。大人たちはラジオで玉音放送を拝聴していたのでしよう。

旧青梅町仲町の本家は石屋を営んでいました。裏庭の鶏小屋の前に二く三人入れればいっぱい防空壕がありました。使われた記憶はありません。本家に接した我が家には、表のたたきに防空壕とはいえない穴ボコがありました。物置に使っていたようです。

それでも空襲警報はありました。町役場と警察、消防署は隣りの上町にあったので、サイレンのある物見櫓も近く、したがって音量も大きかったです。

ある夜、空襲警報が鳴り、裏山の麓にある梅岩寺に避難したことをかすかに覚えています。杉の木の鬱蒼とした谷間の墓地です。その夜、近所の人全員が避難したと思います。幼児の私は母親の背中の体温を感じていました。一歳の妹は父の背中だったのでしようか。闇の中、枝から枝へムササビが飛んだようでした。これが私の最初の記憶です。

町の西外れ（裏宿）に母の実家があり、祖父が畑をやっており、野菜か何かもらいに行ったり帰ってきたでしょう。幼児の私は母に手をひかれて夜道を歩いていました。裏通り（七兵衛通り）を家まで半分ほど歩いて来て、森下町の酒造所（元大多摩酒造）の裏手にさしかかったとき、母は、「あれを見な」と南の空を指さしました。酒造所の建物の上、煙突の向こうの空が夕焼けのように焦げていました。

八月一日夜から二日にかけて、八王子、立川、砂川、昭和、福生の多摩地方に空襲があり、「東

京大空襲・戦災誌」によると焼夷弾七万個弱が落とされたといえます。三月の下町大空襲では千六百個余りですから、これは桁違いです。この数字が本当ならポツダム宣言受諾を確信して、在庫一掃したとしか思われません。被災人口は七万五千人余、死者二百二十五人でした。とりわけ、八王子は壊滅に近く、户数一万六千戸のうち、一万五千余戸が焼失しました。

母は私に記憶しておくように指さしたのでしよう。今でも現在は無くなった大多摩酒造の裏通りを通るたび、八王子の方角、南の空をふと見上げてしまいます。終戦直後、八王子出身の職人（石工）のTさんに連れられて八王子に出かけたことがあります。

八王子は家一軒ない焦土で、やたら道路と空が広く感じられました。Tさんは呆然としていたことでしょう。比較するものがあるとなれば、写真で見た広島の大空襲はありません。

横田基地から飛び立った米軍の輸送機が青梅の空を横切るとき、ジュラルミンの白く輝く機体を見て、今でも思い出すことがあります。

それは戦争中か、終戦直後か分かりませんが、父と近所の人とリヤカーを引っ張って、町の東外れ（新町）の畑に、芋かなにかを掘りに行ったときのことです。白昼、奥多摩の山のほうから、B 29の機体がぬっとあらわれたのです。「伏せろ」と誰かが言いました。大人達は道端の桑の木に隠れましたが、幼児は転んだのか、畑の土に顔を押しつけました。隠れたつもりだったのです。

何事もなかったのですが、幼児の丸顔が畑にくぼんでうつり、大人たちが笑いました。幼児の私はなんで笑われたのか分かりませんでした。

B 29は低空飛行で西から東へ去っていきま

海軍整備兵の思い出

萩原勇三



昭和十四年に昭和飛行機に就職し、二十歳で徴兵検査を受け、海軍整備兵となりました。海軍では、飛行機がなくなってきたので段々飛行兵が減って来ていました。徴兵検査は、昭和十七年に農林学校で行われました。海軍整備兵の六番で合格しました。それから自分の身体はもうお上の身体です。昭和十八年、横須賀海兵隊整備科八十四分隊に入隊しました。そこでの訓練はとても厳しく、三カ月いしましたが四カ月ほどやっているように思えました。訓練では、飛行機の整備はほとんどなく、軍歌や手旗等をやらされ、夕方五時から、カッターの手漕ぎ訓練をやっていました。朝は六時に起床ラッパが鳴り、寄宿舎では、

ハンモックに寝ていました。朝起きるとすぐ朝礼があり、帽子をかぶっていないといけないため、帽子と靴下はいつも持っていました。夜は、二十五秒以内でハンモックを設置しなければなりません。出来ない、通路に並べられて罰を受けます。ハンモックはほぐさなければうまく付けられないし、隣との間が狭くて、うまく掛けられません。また、その中で朝まで寝るのも大変でした。

朝礼では、点呼が終わると上半身裸のまま体操をする時もありました。三十分ほど走られる時もありました。それもきつかったです。当番だと掃除もあります。朝八時から麦と米の朝食で、大きい釜に蒸気で蒸すので蒸気臭いご飯でした。訓練の様子を見て、赴任地が決められていたのだと思います。

その後私は、横須賀の航空隊に赴任しました。そこへ行ったら、その日のうちに飛行機にガソリンを詰めると言われました。整備兵として今までやっていたので燃料補給ができ

ました。終わると身上調査があつて、雷爆練習生に行けと言われました。魚雷です。それで横須賀から夜十一時の夜行列車に乗り、五人で桜島の近くにある鹿屋へ行きました。毎朝砂場で駆け足を三十分〜四十分やらされました。練習生としての十か月間、徹底して魚雷を分解して組み立てる作業をしました。赤本と呼ばれ、表紙にマル秘と書かれた魚雷に関する分厚い本があり、この本はもし無くせば命取りになるので大変でした。無くしたため、山の方へ逃げた人もいました。

魚雷を飛行機に積むのですが、かなりの重さがあります。零戦には重くて積めません。飛行機が飛びづらくなるため、終戦間近の時には、せっかく作った魚雷を近くの海に落とすして捨てたとパイロットから聞きました。その後、宮崎に異動となり、魚雷を調整する作業をするようになりました。魚雷が海中で安定してまっすぐ進むように研究を行いました。宮崎では外出ができませんでした。駅の周り

に下宿があつて、そこから通つていました。

しかしすぐにまた鹿屋に異動となり、魚雷の整備を担当しました。鹿屋にもアメリカの空爆が結構ありました。基地の上空にもアメリカの飛行機が飛んでいましたが、山があつてカモフラージュしていたこともあり、空爆を免れました。私は死にそうになったことはありませんでしたが、一緒に下宿していた相棒は亡くなってしまいました。

沖縄戦が始まると、魚雷を積んだ飛行機が鹿屋の基地から沖縄に飛び立っていきます。夜十一時頃飛び立っていくので、帰還したかどうかは分かりませんでした。鹿児島・知覧・長崎などからも沖縄に飛び立っていきました。六月二十三日に沖縄戦が終わりましたが、その頃ソ連の戦車が日本に来るといふ情報の流れ、道路に穴を掘り蛸壺で戦車に対抗する訓練が三ヶ月ほど行われました。

八月十五日に終戦となりました。このまま海軍で上の位まで頑張つて行こうと思つてい

たので、日本が負けたという事が信じられませんでした。訓示もなく、軍事手帳をどうするのか、残務処理をどうしているのか分かりませんでした。しかし、ソ連が来るかもしれないと、蝟壺での訓練はしばらくやっていました。

その後、アメリカの空挺隊が鹿屋に来て、見つかったら殺されてしまうというデマが流れました。早く逃げなければと恐怖に追い立てられ、みんな必死に鉄道の駅がある志布志まで移動しました。最初は毛布や身の周りの品を持って歩き出しましたが、重たいので途中で全て捨てました。志布志では、ものすごい数の兵隊がいて、電車に乗りきれない状況でした。乗客の重みで電車が坂道で動かなくなったり、屋根に乗っている者がトンネルにぶつかり亡くなったりしました。

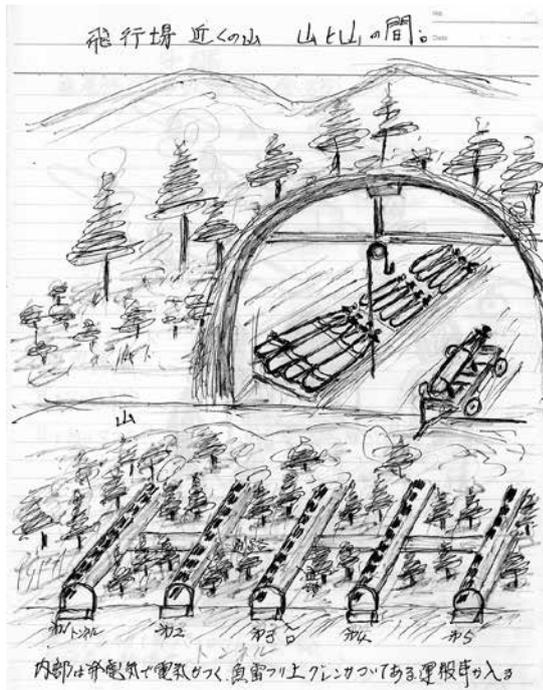
電車を乗り継ぎ、必死の思いで東京駅まで戻ってきましたが、鹿屋から東京までの間の食事はどうしたのかなど、まったく覚えてい

ません。

東京に戻ってからは、飛行機の整備の仕事をしていましたが、横須賀、鹿屋等での体験は今でも忘れる事なく、心の中に残っています。



横須賀海兵団



海軍鹿屋基地

あゝ海軍特別年少兵

原 島 正 一



年少兵が新聞に映画にと国民の目に触れ、感動を与えたのは、戦後二十五年の事、当時の少年達は、昭和の白虎隊としての誇りを持ち社会で立派に活躍しています。思えば昭和十六年、大東亜戦争勃発の数か月前だったと思います。高等科二年生の時、担任の先生から、この中に海軍に志願する人はいないかと話があり、同級生と二人で志願しましたが、同級生は残念ながら不合格となり、私だけ合格しました。

三田村（現在の沢井地区）から四人が合格しました。当時僅か十五歳になったばかりの少年でした。

昭和十七年八月三十一日、村の鎮守様で武

運長久のお祈りをしていただき、軍人となるため横須賀へ出発しました。

横須賀、舞鶴、呉、佐世保の各鎮守府を合わせると、二千七百人くらいでした。入隊してからそれぞれの分隊に分かれて、軍事訓練が始まり、それは、厳しいものでした。来る日も来る日も普通学、軍事学、それに伴う訓練がありました。特に軍事訓練の十六人で漕ぐカッターでは、背が低い方だったので長い櫂が大変でした。色々の訓練を経て十一ヶ月で卒業し、普通科砲術練習生となりました。

それから特殊教育で三ヶ月半の教育を受け、卒業して横須賀海兵团付けを命ぜられ、補欠員として戦地への出発待ちとなりました。

昭和十九年三月十九日、五十五警備隊付けとなり、出発準備に入りました。その間、時間があつたので四月二十二日に外出の許可をいただき、郷里に帰り親と会い、戦地へ立つ事を知らせたその足で小学校へ寄り、別れのあいさつをして横浜に帰りました。四月二十

八日、サイパンに向け出航して父島を通過し、サイパン島へ着く前日、敵潜水艦がいるとの情報が入り、急遽通り過ぎてテニヤン島を迂回して一日遅れで島に着きました。

上陸して休む間もなくパガン島への移動準備に取り掛かかりました。パガン島は港が小さいため、一度に着く事が不可能なので四回で移動することになりました。我が小隊は三便となり、五月五日に出て翌六日にパガン島に着きました。民間の家があったので借り受け、宿舎としました。

作業をしている間に六月十二日が来ました。忘れもしない八時頃、敵機八十機位が来襲し、本部の建物は壊滅し、毎日グラマン戦闘機の来襲があり、六月二十一日は朝から百二十機位の来襲が続きました。二番機銃陣地が直撃弾を受け、十名全員が戦死しました。それ以後は定期的に四機編隊で八組の敵機が、八時から九時に空襲し、最初に爆撃、次に機銃掃射の繰り返しでした。その間は全力で敵機と

交戦しました。このような状況下において食糧は日ごとに欠乏の一途となり、陣地周辺にさつまいもを作り、カタツムリを取って空腹を補い、それとともに椰子の実やパイヤの芯など、食べられるものは何でも集めました。野菜類はないので海水をくんできて塩の代わりにしてさつまいもの葉を食べました。栄養もなく段々と身体の弱い人は衰弱してしまい、顔面蒼白となり目だけが光る悲惨な状態となつてしまいました。七月二十一日、サイパン玉砕の報を聞き、我がパガン島もそうなるかと覚悟していましたが、それも無く本土爆撃となりました。時々戦闘機がサイパンから来ましたが、本土爆撃の残りの爆弾を落としていく程度になり、危険もなくなりました。

昭和二十年八月二十四日、空からビラがまかれ日本国が無条件降伏をしたという事でした。特年兵の斎藤君は、アメンバー赤痢患者になり、医者の手当ても受けられず帰らぬ人となりました。十月二十日、武装解除の命令

がかかって海岸へ整列し、米軍が来て武器弾薬を出すようにいわれました。港には長運丸が迎えに来ていました。乗船してびっくりしたことに、同年兵の須永君がいて、抱き合つて無事を喜び合いました。途中、硫黄島を左に見て父島へ寄り、傷病者を乗せて浦賀港に着きました。五日がかりで本土に着きました。復員の手続きをして十月三十日に故郷に帰る事が出来ました。

残念な事に、先に述べた三田村の他の三人は戦死しました。御冥福をお祈りします。

木崎 実君 二俣尾四丁目

昭和十九年十一月二十五日（フィリピン）

谷合 昭二君 御岳本町

昭和十九年八月二日（テナアン島）

神田 昭二君 御岳山

昭和二十年六月二十日（ミンダナオ島）

最後の日本兵

皆川 文 藏



昭和十六年四月一日、大砲機関銃中隊へ入隊しました。体が健康だったので義務で行きました。本音を言えば、長男なので家に居たかったです、命令なので仕方ありませんでした。

入隊後、大砲を撃つ練習をしていました。山に大砲を撃ち、拾いに行きバラして、もう一度作り直すことをしました。「同列同級とても停年に新旧あれば新任の者は旧任の者に服従すべき」と習っていました。

三年兵となり、仙台へ火薬の調合を習いに行ったら後、故郷の新潟に戻り、その後、大砲を撃つ練習でサイパン島に向かい、半年ほど過ごしました。

そしてグアム島へ行きました。山影に陣地を作って構えていました。日本の軍艦一隻に對し、アメリカ軍は大小の軍艦、舟艇合わせ三百隻程いました。海に明かりが灯り、一つの街が出来たと思えるほどでした。人間が居てもいなくても、アメリカ軍は撃ってきました。山が一晩で消える位撃ち続けていました。日本には物資が無く、鉄砲を「あまり使うな」と言われていたので、撃ちたくても撃てませんでした。日本は物資の違いで戦争に負けたんだと思います。戦争は怖かったが、命令なので逃げ出せませんでした。二十人程の部隊で、将校が命令を出していました。仲間が死んでも助けられず、次の場所に行くしかありませんでした。

グアム島が玉碎し、陣地がアメリカ軍に占領され、もう負けたと思いました。降伏し手を挙げて出て行く者もいましたが、「敵の捕虜になったら死刑、銃殺になる」との書物があつたため、私はここで骨を埋める覚悟をし、

大砲を捨て野生の植物と共に生きて行くを決め、ジャングルに入り生活を始めました。

ジャングルでの食べ物は、草の葉、木の実、かたつむりは洗って煮て何百回も食べました。山に入ればいもがありました、掘った所が分かればアメリカ軍に見つかり、殺されてしまふので分からない様に掘り起こしました。米粒一粒も食べられなかったが、腹がすいた時に食べる葉や木の実は美味しかったです。水を飲む時は、雨が降った時、タイヤのチューブに水を溜めておきました。スコールが降ってきた時は、着物を脱いで体を洗いました。雨が降って来ても隠れる場所もなく、濡れたまままで過ごしました。

ジャングルで生活していると、着物はすぐ破けてしまうので、夜、ゴミ捨て場から着物を取って来て、自分で着物を繕って着ました。破けた着物の糸をほどいて繕って強くして糸として使用しました。針は、捨ててあったベットの針金を焼いて伸ばし、キリの様に尖らせ

て代用しました。

ジャングルに入ったばかりの頃は、他にも部隊がいて、声を掛け合う事もありました。また、食べ物を探しに行った時に「横井庄一」氏らと出会いました。

生活をしていくうちに、木を切り、トタンを引き込んで家を造ろうとする者もいましたが、「そんなことをしたらアメリカ軍に見つかる。贅沢は敵だ。」と意見が分かれる事もありました。また、牛を盗んで原住民に見つかり、それ以降帰ってこなかったという話も聞きました。

十六年この生活が続きました。

発見された時の様子は、木に登った所で、原住民に見つかり、鉄砲で頭を殴られ手を後ろに回されて、原住民の住居に連れて行かれました。一泊し食事をさせてもらいました。食事は美味しかったが、殺されるかもと気持ち揺らぎました。

その後ヘリコプターに乗せられ、捕まった

所を旋回すると、地上では、日本兵が手を挙げて降伏している姿が見え、「私は、手を挙げることはしない。日本の恥だ」と思いました。

それから飛行機で日本へ向かう事となりました。「殺されるのか？大丈夫なのか？」と気持ちちは半々でしたが、富士山を見て着陸し、姉の姿を見たときに、戦争が終わっていることが分かり安心できました。

ジャングル生活が一番辛かったのは、アメリカ軍が鉄砲を持って捜しにくるので、転々と逃げ歩かなければならなかったことです。食べ物、着物などの物資は大切に使いました。十六年間にも及ぶジャングル生活の中での生きる希望となったのは、体が丈夫であり、亡くなった方々が守ってくれたことです。神様、仏様、お地藏様、お釈迦様、全てのものに手を合わせる信仰心が大切でした。また、意地、度胸、根性がないと生きられませんでした。生活をしていく上で人を頼ってはいけませんでした。

亡き父が、功七級金鷄勲章をもらい、その父の血を受け継いでいると思う事も力になりました。

私が伝えたい事は、戦争とは、勝ったら分らない事だが、負けたらこんな辛いことはなく、二度とあっては困るということです。物資を大切に大切にしたい。

その後は、ジャングルでの生活を忘れ、現状の生活に一心に打ち込んで行く事が大切でした。

戦後七十年平和事業



慰霊花火「白菊」の打上げ（第67回青梅市納涼花火大会にて）

岡ヨシエさんの被爆体験

青梅市・羽村市共同事業

「青梅・羽村ピースメツセンジャー」にて

青梅市と羽村市では、戦争の悲惨さや平和の大切さを体験として心で感じ取ることを目的として、両市の中学生を広島へ派遣しました。

その際に中学生が拝聴した、当時動員学徒として軍の司令部で被爆した岡ヨシエさんの体験談を掲載します。



昭和二十年八月六日に、広島で原子爆弾が炸裂した日の前後の様子をお話します。

比治山高等女学校の三年生になったとき、学徒動員が決まりました。当時、広島城の敷地内に、中国地方五県の陸軍の司令部があり、そこにある半地下の壕で、軍の情報を受けたり送ったりするという大変重要なお仕事をすることになりました。

八月五日が来ました。私はその日、夜勤の

当番でした。「B 29、一機、豊後水道北上中」という情報が入ってきました。九州と四国の間の豊後水道です。北上中ということは、広島に向かっている訳です。しかし、そのB 29はあつと言う間に飛び去って行き、空襲警報解除、警戒警報解除になりました。あーよかったですね。この上を通り過ぎただけなのねと、ほっとしていました。すると一時間も経たないうちにこの情報室に「B 29、一機、山陰方面から広島県に侵入」という情報がまた入ります。それはさっき北の方に飛んで行ったB 29なのか別のB 29なのか分からないけれど、また警戒警報発令、空襲警報発令となる。二度も三度もたった一機のB 29が行ったり来たりする。後で分かった事だけれど、あくる日の八月六日に原子爆弾を落とすための気象観測として、広島の上空を飛ばしていたのでした。

午後十一時過ぎ、情報室に「B 29、百二十機、西宮に来襲」という情報が入ります。私達が夜勤のお仕事に就いている時、一度に百二十

機の飛行機が飛来してくるなど聞いたことがありませんでした。西宮に焼夷弾が落とされ、大火災になって沢山の人々が焼け、亡くなっ
ていきました。

六日になり、西宮から敵機が去りました。大変だったねと
思っている時に、午前三時過ぎ、「B 29、七十機、愛媛県今治に
来襲」という情報がまた入ります。一晩に二度も来たのかと思
いました。今治も大変な被害を受け、焼土となり、沢山の人々
が亡くなっていきました。

やっと敵機が去り、午前四時頃、また「B 29、百十機、山口
県宇部に来襲」の情報が入ります。西宮、今治、宇部に続々と
空襲をかけてきて大被害となります。私達は、忙しく一睡も
できず六日の朝を迎える事になりました。

七時二十分過ぎ、「B 29、一機、豊後水道を北上中」と、夕べ
と同じ情報が入り、同じところを通過するだけだと思いま
した。

ろが、実際は、エノラ・ゲイの先導機でした。「広島
島の天気、最高に良好。第一目標に投下する
ように」ということを、後ろからついて来て
いるエノラ・ゲイに通信を送りながら飛んで
いたのでした。警報もすぐに解除となりました。

八時十分となり、情報室に「B 29、三機、
広島県東方向に侵入」という情報が入りまし
た。しかし、広島に刻々と近づきつつありと
の情報も来ても警報が鳴りません。私は、た
まらなくなり立ち上がって、警報が出ない訳
を知らうと見ていました。その後、ブザーが
鳴り、メモが届き、交換機の前に座り、通信
用のコードを差し込み、大声で叫びながら「八
時十三分、広島山口警戒警報ハ：（ツレイ）」
と読み上げた時、キラキラとした、ものすご
く真っ白い光が入ってきました。事故だと思っ
た瞬間、体が浮き上がって飛ばされていまし
た。その時、脳震盪を起こしていて、三分く
五分で意識が戻ると気分が悪く、自分では目
を開けたつもりだけれど、灰色一色で何も見

えませんでした。

放射能の煙であまり見えなかつたけれど、隅の方に手で耳と顔を覆って伏せ、うずくまっている生徒がいました。瓦礫をかき分けながら近づいて、顔を覆っている指を一本一本剥がしてみると、どろどろと血が流れてきました。板村さんと二人で地下壕から出た時、今までと全く違った情景に出くわしました。当時、三つの建物があって、一号庁舎は司令官と参謀がいる立派な建物。二号庁舎は幹部の将校がいるところ、三号庁舎は軍人を教育するところ。その三つの建物が全部ぺしゃんこになっていました。火が出てないけれど異常にモヤっていました。この状況はなんだろうと思いましたが。少し走って広島が一望できる土手の上に行くと、土手の上から見渡す限り瓦礫、瓦礫、瓦礫。どこまでも赤茶一色の瓦礫

の景色が見えました。私達の住んでいる町が無くなっています。遮蔽物が無いので、瀬戸内海の海がキラキラ光って見えました。大変なことになっていると思いました。怪我をして倒れている兵隊さんが見えたので、「大丈夫ですか？」と声をかけた時、うめくように「新型爆弾にやられた。」と返事がありました。新型爆弾、聞いたことがあります。

仕事場に戻り、転がっている電話がつながるかやってみようと思い、信号を送ってみましたが、一つ目、二つ目は何の反応もなく、三つ目か四つ目かで信号が送れました。「こちら福山歩兵連隊司令部」と兵隊さんが出ました。直通電話で名乗る必要がないので、いきなり「大変です。」と言いました。向こうの兵隊さんは、事情が分からないので、冷静な声で「何が大変なのだ。」と言われました。「広島がやられました。」と言ったとたん「むっ、司令部がやられたのか。」と声が倍くらい大きくなりました。「司令部だけではありません

ん。広島が全滅しています。」と答えましたら、暫く返事がありませんでした。始め司令部だけがやられたのかと思っただけ、広島が全滅と伝えたので、暫く声が出なかったのです。もう一度「広島が全滅しています。」と言ったら「何で全滅なんだ。理由を言いなさい。どういう理由で全滅なのか。」と言われました。私は、理由が分からない。見た目が全滅なのに理由は分からないと心で思っていました。返事に困り暫く黙っていました。火傷を負って死んでいった兵隊さんの「新型爆弾にやられた。」と言った言葉を思い出し、「新型爆弾にやられました。」と言ったら「何、新型爆弾か！」と大声で言われ、そのとき火の手が上がりました。窓一杯に、ごーっと、ものすごい音、勢いで、炎の先が三角に尖って二本、火柱になって入って来て、しゃがんだ私の頬をチリチリと撫でていく。「火がつかしました。ここを出て行きます。」と言ったら、「気を付けるんだよ。」と言われ、板村さんと外に出

たら、火がもうもうとものすごい炎が立っていました。

大本營の後ろに軍人と一緒に朝礼をする場所があり、そこに行ったら同級生に会えるかもしれないと思い、板村さんと二人で走り行きました。途中で火が燃え始め建物の底の方から「熱いよう。助けてくれ。」と言う事務員の声、兵隊さんの「助けてくれ。」と言う声が聞こえるのだけれど、建物の材木がぶれていて助けることは出来ません。ものすごい傷を負っている軍人の人は、お腹が割れたり、頭が割れたり、背中が割れたりしていました。

火に囲まれてしまい、木くずが一杯で水がなく、ゴミ箱みたいになっている池に飛び込みました。周りの炎で髪はパシパシ、顔も熱くてほっぺたが真っ赤になり、このまま二三分続いたら私達は死ぬと思いました。「板村さん、覚悟しておこうね。私達ここで焼け死ぬよ。」その時も全然怖くありませんでし

た。人間は極限状態になると感情がブツンとなりません。あの当時は、子供達はいざとなったらいつでも死ぬるといふ覚悟がありました。

板村さんと手をつないでいたその時、真っ黒な雨が降ってきました。大粒で体に当たると痛くて着ている服がどろどろになるほどでした。雨は三十分くらい降っていました。これは、たっぷりと放射能を含んだ怖い雨で、そのために原爆症になって亡くなった人が沢山いました。私達も全身に黒い雨を浴び、その雨によって火が消えていくので、どんなに恐ろしい雨なのか分からずに、黒い雨に感謝しました。

それから友達を探して歩き、石の上に三人座っているのが見えました。きっと同級生に違いない。そう思って走って行きました。右の生徒は、顔が倍くらいに腫れ上がり、眼がつぶれ、火傷で一皮むけて髪の毛は引きちぎられたようになっていて、普通なら名札を付けているので誰か分かるのだけれど、同級生

なのに分かりませんでした。それぐらいむごい状態で、可愛そうで名前を聞けませんでした。真ん中の生徒に目を向けると、きれいな顔をしていて浜岡さんと分かりました。よく見ると、右手が肩から手首まで内側が裂けてぶら下がっていて、中の骨まで見えていて、自分の膝に乗せていました。「お水が欲しい。お水が欲しい。」と言うのだけれど「ごめんね。どこにもないのよ。ごめんね。」と言うしかなく、左の生徒は、全身が火傷でズルズルになって首の後ろが垂れていて、本当に痛ましい状態でした。

夕方までに山口県と岡山県から軍隊の援助隊が来て、仮の救護所を作ってくれましたが、何をしてもあげられるわけでもなく、ただ声をかけてあげるだけでした。私達はここで終戦まで救護をするわけですが、みんなどんどん亡くなっていきました。

七日の朝、たった一晚なのに、けがをした人たちの体中に何匹もの蛆虫が湧いていて、

取ってあげること出来ず、本当にかわいそうでした。一人の生徒のお母さんが我が子を探しに来ました。体がズルズルになった我が子を抱き上げながら、「なんてむごいことだね。

可哀想に、可哀想に。」と言ってお母さんの眼から涙がポロポロとこぼれ、その生徒のほっぺにポタポタと落ちました。すると、眼を開ける事も出来ない程弱り果てていたのに、うっすらと目を開けました。お母さんが「気がついた。お母さんがここに来たよ。お母さんがそばにいるよ。」と何度も何度も言っていました。「お母さん、お母さん、泣かないで、私、お国の役に立ったのだから泣かないで。」と死んでいきました。みんなお国の為兵隊さんたちと一緒に頑張りますという気持ちでいたからそんな言葉が出たのだと思います。司令部の全員が亡くなり、松村参謀長ただ一人を残して司令官も参謀も全滅しました。

それから七十年がたちました。板村さんは、肝臓がんで亡くなりました。私は、血液に異

常が出て何度か倒れました。

今の平和というのは、沢山の犠牲のもとに出来たのです。優秀な若い人達がお国を守りますと言って戦争に行き、死んでいきました。そういう悲しい時代があって今の平和が出来ました。戦争程悲惨なものはないということ、深く深く胸に刻んでください。絶対に平和を守って見せるという気持ちで頑張ってほしいです。これからの日本は皆様方の肩にかかっていきます。

海老名香葉子さんの戦争体験

青梅市平和事業

「海老名香葉子講演会・泰葉コンサート」にて

青梅市では戦後七十年事業として、落語家初代林家三平氏の奥様である海老名香葉子さんの講演会を開催しました。

今回、海老名さんの御協力をいただき、講演内容の一部を掲載いたします。



私のうちは代々釣り竿職人で、本所、現在の墨田区で五代続いております。

家族も大勢でした。両親、おばあちゃん、兄が三人、八歳下に弟が一人。居候の人が五人もいました。それでも女の子一人でしたから、香葉子や香葉子やと、とてもかわいかったです。もらいました。隣近所の情が通ったいい町でした。

昭和十九年六月、疎開の話があり、父の妹

の旦那さんのいる沼津に行くことになりました。出発の朝、「おかわり！」と母にお茶碗を差し出すと、母の目が赤くなっていました。顔を上げるとみんなの目が私に向けられて、私はおどけてしまいました。「私一人で疎開するの平気だよ、何でもないよ。」と。

出発前、母に呼ばれて母の箆笥の前に座ると、小引き出しからお守りがいっぱい入った袋が取り出されました。お守りを首に下げてくれた母が私の手をぎゅっと握って、「香葉子は明るくて元気で強い子だから大丈夫よね。」と言いました。私が大丈夫と言うと、ぼろぼろ涙をこぼしました。そして、「いつも笑顔でいてちょうだい、笑顔でいればいい友達ができるよ。」と言ったので、「うん分かった、そうするわ。」と答えました。

父に連れられ出発しました。無口な父が一生懸命話してくれ、最後には歌まで歌ってくれました。休んだときには、「本当に大き

くなつたね。」と言ひ、「私がんばるからね。」
と言うと「うんがんばってね。」と頭を撫で
てくれました。

昭和二十年三月九日、その晩、風がびゅう
びゅう吹いている中、「退避！退避！」と退
避命令が出ました。あわてて山の上に登って
いきました。真夜中です。獣道を高い山の上
に登っていきましたら、「東京の空が赤いぞ！」
と声が出ました。まさか、家のみんなは大
丈夫かな。でも兄ちゃんたちも元気だし父
ちゃんもいる。大丈夫だ。」と自分に言い聞
かせて、でも心配で心配でやりきれない思
いで登っていきましたら、まるで蛍光灯の灯
がついているみたいにぼおーっと赤くなつて
いるんです。駿河湾から山と海を越えて行く東
京なのに、赤く見えたんです。私は、凍てつ
いた地に正座して、「神様、父ちゃん母ちゃん、
みんなを助けてください。弟を痛い思いに遭
わせないでください。お願いします。」と一
心をお願いしました。

明くる日学校に行きますと、友達に「本所
深川は全滅だつてよ。」と言われました。雑
炊が喉を通らない、そのくらい心配でした。

四日経ち、学校から帰りましたら、おばさ
んが「かよちゃんかよちゃん！」と呼ぶので
あわてて外に出て行きましたら、麦畑のどこ
ろに唇が焼けて膨れあがつた三番目の兄が
ぼうつと立っていたんです。「きい兄ちゃー
ん！」と呼びますと、「香葉子、みんな死ん
じゃったんだ、みんな死んじゃったんだよ。」
と私に言いました。兄は何度も何度も私に
「ごめんねごめんね。」と謝るんです。私は兄
を慰めるのが先でした。「兄ちゃんがんばつ
て、がんばつてね。」と兄の背中を撫でました。
二人抱き合つて一晩泣きました。

兄の話によると、父が警防団から帰つてき
たときには家に火がついていました。弟を抱
いて防空壕に入っていた母を引っ張り出して、
兄ちゃんたちと一緒に逃げようということに
なつたら、おばあちゃんも国防婦人会から帰っ

てきました。みんなが家の前にそろった時には、上も下も右も左も前も後ろも、全部が火で、その中を、風上に逃げました。小学校の門が閉じられていて、校門の横の塀を乗り越えて、校舎と塀の間に入って火を少しでも防ごうとしたら、もう風が吹くのと熱風とでぶつぶつ音がするほどでした。母が弟を胸に抱いて地に突っ伏して、父がそこに覆い被さり、おばあちゃんを挟んで家族みんなで固まりました。兄が、「日本男児だ、潔く舌噛んで死のう。」と言った時に、父が、「喜三郎、あそこへ行け！」と、校舎の高いところの窓が少し開いていたのを指差しました。普通では行けないような高さでしたが、兄は夢中でそこへよじ登ったのです。兄は明け方になって、みんなを探せるだけ探したけど、見つかりませんでした。みんな真っ黒焦げの死体になっていて、分かりませんでした。

兄は家の前の階段に座り、三日間何も食べず水道の水だけ飲んで我慢して、家族の帰り

を待っていたそうです。そして、私を訪ねてきたのです。どんな気持ちで待っていたんだろうな。兄の気持ちを思うと、兄をどう慰めていいか分からなくて、「きい兄ちゃん、えらかったじゃない。えらいよ。きい兄ちゃんえらかったんだからがんばろうよ、がんばろうよ。」と兄のことを慰めました。

明くる日、兄は「二人でここの家にお世話になれない。僕は東京へ帰る。」と中学一年生で何も当てもないのに、東京へ戻っていききました。

敗戦を迎えました。沼津のおばさんが「かよちゃんの父ちゃんも母ちゃんもみんな犬死にしちゃったね。」と泣いたんです。犬死にしたって言われたんです。私はそれまで、お国のために死んだんだ、天皇陛下のために死んだんだと思いこんでいました。それが犬死にしちゃったと言われたんです。ただ呆然としていただけでした。

十月に、東京に戻るようになりました。一

面が焼け野原。これでどうやって生きていくんだろうと思うほど、全部焼け野原でした。中野のおばさんの家へ行きました。そうしましたら、おばさんは人が変わってしまいました。

今までは何かある度にうちに寄って「香葉子ちゃん、香葉子ちゃん。」とかわいがつてくれたおばさん達が、「おまえみたいなのが生き残って本当に情けないねえ。死んでくれればよかったのに。」と面と向かって言われました。本当にその時はそうだなあと思いました。たけれども、あんまり言われると本当に今から死んじゃえばいいかなと思うくらい、悲しい思いでした。

学校へはほとんど行きませんでした。鉛筆、紙がほしい前に、食べるものがほしいんです。お腹がぺこぺこです。焼けトタンを囲って、やっと一坪くらいのところ家族四人、おじさんとおばさんと女の子と私が座ってるんですから、ちよつと動くとはたんと倒れるくらいの家だったんです。そこで何とか雨露をし

のぐっていう感じだったんです。トイレはすぐ横のところ穴を掘って、雨が降るときは傘を差して、そこで用を足しました。おばさんはもうヒステリー状態でした。

ある時、おばさんにあんまり怒られるものですから、家出をしました。行ってはいけなと言われていた焼け跡に行きました。もしかしたらみんなが生きてるかもしれないと思い、ドキドキしながら家の焼け跡の前へ行きました。石段がそのまま残っていました。金庫がひっくり返っていて、後ろからザクロのように開けられていて中身は全部なくなっていました。あ、家の跡だと思い、掘り返して掘り返して、そしたら弟の布団の残りや焼け切れだとか、父の仕事のもの、お茶碗のかけらとか、懐かしい物がいっぱい出てきました。「私みんなと一緒に死んでれば、幸せだったのにな。」と、その時思いました。

お国からは、おにぎり一つ、乾パン一つ、もらったこともありませぬ。私の家族は行方

不明のままです。遺族じゃないし、孤児でもないんです。何にもいただかない。その中で生き抜くには、大事にしていたお金を闇市に持って行きましたね、一番安い「ふすまこ」という赤茶色をした麦の皮を買いました。それをお団子のようにして、火をもらってきて、お鍋にお水張ってそこに入れたものを食べてしのぎました。

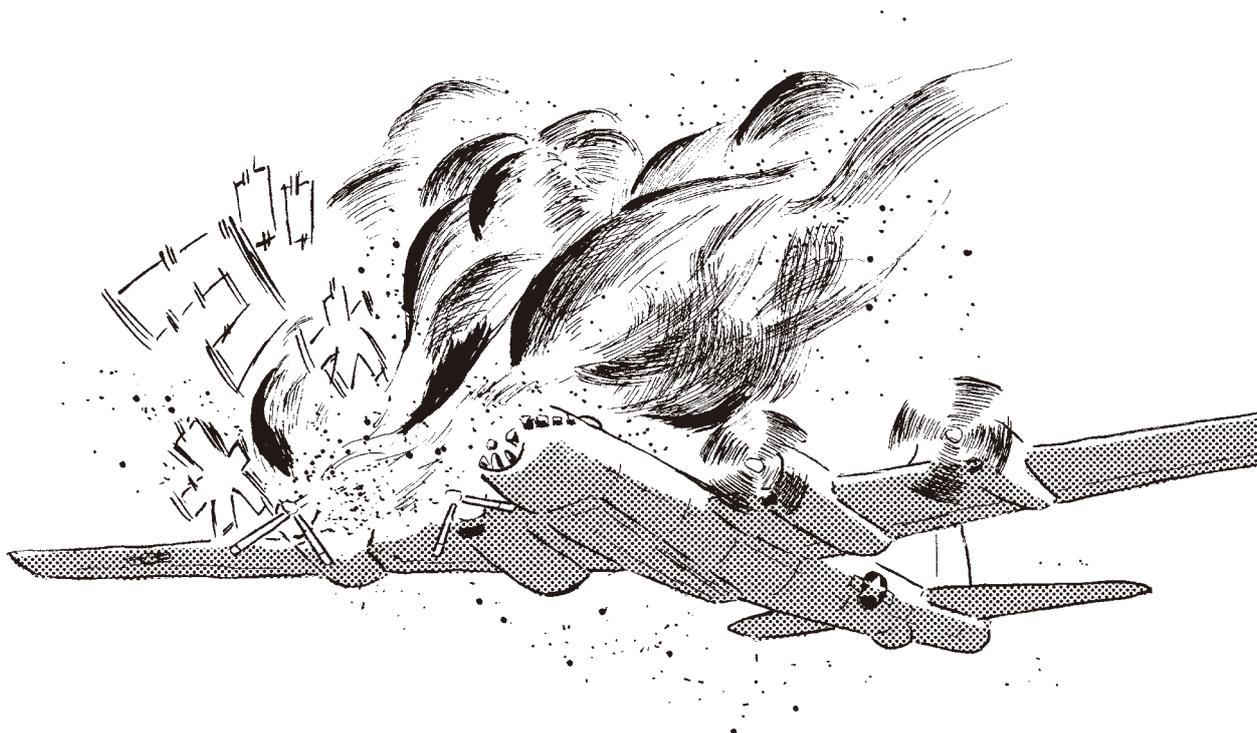
春になりました。「あかぎ」だとか「はこべ」だとか雑草が生えてきました。「かよちゃん向こうに行くつるむらさきが生えてるよ！」と言われて、そこへ飛んで行って、つるむらさきの芯まで採ってきて食べました。学校に行くどころか、その日一日を生きるのが大変でした。

親のいない子は、本当に無惨で、悲惨です。父の手紙に、「寂しくなったら、東京の空に父ちゃん父ちゃん父ちゃん、と三回呼んでごらんささい。」というのがありましたので、呼びました。母に「笑顔でいてよ。」と言わ

れたので、どんなに苦しくても、涙を流しながらでも笑顔でいようと誓いました。そうしてきましたら思いがけない人に巡り会い、「いやぁ生きてたのか、よかったなあ。竿忠の娘が生きてたんだ。よかったよかった。」と喜んでくださって、先代の金馬師匠に拾われました。初めて会って、何の証拠もなく、私の身元も何も分からないのに、「うちの子におなり、おなり。」と言ってくださったのです。で、おかみさんに、「母さん、竿忠の子だよ。うちの子にしよう。」「よござんすよ。」となり、もうその時はとても嬉しかったです。温かいお布団に手足を伸ばして寝た時に、「これで助かった、生きていける。」と思いました。

二度と戦争が無いように、偉い方達にもっともつと理解してもらって、話し合って、和解して、そして、世界の人たちがみんな手をつないでいけるようにしてほしいと思います。

資料



墜落寸前のB29（宿谷一二さん画）

『青梅でのできごと』

青梅の被害

青梅の地域には空襲の目標となるような、目立った軍事関係の施設も、大きな市街地もありませんでした。首都東京や八王子のように空襲にさらされることはありませんでしたが、まったく被害がなかったわけではありません。

昭和二十年（一九四五年）二月二十五日の朝、アメリカ軍の艦載機が東青梅駅に停車中の電車に対して機銃掃射を加え、悲しいことに氷川町（現在の奥多摩町）に住んでいた少女にあたり、若い命が奪われてしまいました。当時、友人で同級生だった方などのお話によると、この気

の毒な少女は都立第九高等女学校の二年生で、女子学徒隊として動員されていた、中神の大神航空という会社から帰宅の途中だったということです。四月には、B29が市内柚木の山林に墜落し火災が起りました。また、四月には、平溝上空を通過した米軍機が目的もなく爆弾を投下、数軒の民家が破壊され五人が亡くなりました。

疎開してきた人びと

ミッドウエーの海戦で日本軍が敗れると、米軍機の本土来襲は時間の問題という緊迫した事態に追い込まれました。特に首都東京をはじめ大都市の危機は高まり、昭和十九年（一九四四年）政府は「疎開令」を発して、都市住民や軍需工場などの地方分散をはかりました。疎開は、

まず幼い学童から始まりました。青梅にも都会から多くの人びとが疎開してきました。品川区立国民学校の三年生以上の学童たちも親元を離れて集団でやってきました。皆、十歳前後の子どもたちです。どんなにか辛くさびしかったことでしょう。

東京都心の人ばかりでなく、八丈島や神津島からの島の人びとの疎開もありました。島の習慣で、頭の上に荷物を乗せて運ぶ女性の姿が、青梅の人たちには珍しく映りました。そのほか、親戚や知り合いを頼ってくる人も大勢いました。昭和十五年（一九四〇年）には四万人に満たなかった現在の青梅市域の人口が、五年の間に五万数千人にふくれあがったということです。ところによっては、人口が六割近く増加した村もあったということです。疎開した人々の中には著名な文化人や

芸術家もいました。滝の上には歌人の高田浪吉氏が、柚木には作家の吉川英治氏が、沢井上分には日本画家の川合玉堂氏が、また、二俣尾の高源寺には彫刻家の朝倉文夫氏、同じく二俣尾には画家の田中以知庵氏、新井勝利氏が疎開してきました。

戦後、高田浪吉、吉川英治、川合玉堂各氏らは青梅に留まりました。青梅の自然とそこに住む人びとを深く愛したからです。これらの人びとが青梅の文化に大きく貢献したことはいうまでもありません。また、著名人ばかりでなく、各地から疎開してきた人びとの中には、実にいろいろな人がいました。短い期間とはいえ、その人たちと青梅の人びとの交流は、文化的な面や、生活感情の上でもそれまでに無かったさまざまな刺激をもたらしたといえます。

引越してきた図書館

第二次世界大戦のさなか、青梅には都立小石川図書館の本がたくさん疎開してきました。現在の青梅市立第一小学校（当時は青梅国民学校）校庭の隅にあった武道場が図書館になりました。もともと学問を尊ぶ気風のあった青梅の人びとは、はるばる疎開してきたこれらの書物を大切に保管しました。

やがて敗戦となり、新しい日本をつくっていかねばならない時代になりました。当時の宇津木林蔵青梅町長は、次代をにやう青少年のために、図書館をつくろうと奔走しました。その結果、昭和二十二年（一九四七年）という戦後間もない時代に、いち早く都立青梅図書館を開館することができましたが、その蔵書の基礎となったのは、小石川図書館から

疎開して来ていた本でした。青梅図書館は地元の文化の向上に大きな役割を果たしました。

戦中戦後年表

西暦	年号	青梅市と周辺地域の出来事	おもな出来事
一九三九	一四年	<p>2 各町村消防組を警防団に改組した 4 青年学校が強化され義務制になった 5 奥多摩橋開通</p> <p>5 御嶽神社奉納武道大会復活、以後終戦時まで行われた ※この年、調布村部落常会設置</p>	<p>3 大学軍事教練必修となる 4 米穀配給統制法公布 5 ノモンハン事件起る 7 国民徴用令公布</p> <p>9 第二次世界大戦勃発 10 価格等統制令公布</p>
一九四〇	一五年	<p>5 東京及び近県に天然痘発生し、各町村臨時種痘実施 6 青梅町商業組合設立 6 神代橋架橋工事着工 9 部落会、町内会隣保班、市町村常会設置を通牒される 10 紀元二千六百年奉祝国民体育大会青梅町大会開催 10 青梅町をはじめ各村蚊帳釣環献納運動実施 11 霞村、聖旨奉戴強化村に指定される 12 青梅町寺院教会等退蔵金属品献納運動実施 ※この年国民体力法により各町村青年の体力検査実施 各町村に生活必需品配給制度実施</p>	<p>6 砂糖・マッチの切符制実施 7 日本労働総同盟・大日本農民組合など労働農民組合相ついて解散 8 国民精神総動員本部「贅沢は敵だ」の立看板を市内に配布 9 日独伊三国同盟成立 10 各政党解党し大政翼賛会結成 11 モンペ姿の七五三行われる ※この年、紀元二千六百年祝賀行事多彩</p>
一九四一	一六年	<p>3 各町村文部省令により、男女青年団と少年団を統合して「青少年団」を結成 3 『青梅郷土誌』刊行される 4 米穀配給統制実施 11 三田村森林</p>	<p>3 国民学校令公布 4 東京・大阪両府で米穀配給通帳制はじまる 12 日本軍ハワイ空襲く太平洋戦争勃発 12 言論・出版・集会・結社等臨時取締法公布</p>

	<p>組合設立 ※この年、小曾木村・成木村森林組合設立</p>	
<p>一九四二</p>	<p>一七年</p> <p>3 空襲警報発令される 3 一般家庭金属回収実施 3 霞、三田、翼賛壮年団結成 5 太平洋戦下各町村翼賛町村会選挙執行 5 大日本婦人会三田村支部結成 12 保健協会を廃して三田村健康保険組合設立 ※この年、吉野村森林組合設立 調布村区长制を廃し、部落常会設置 西多摩郡翼賛壮年団結成 ヒマ栽培献納運動はじまる 霞村保健協会設立</p>	<p>1 日本軍マニラ占領 2 シンガポール占領 2 衣料切符制実施 2 食糧管理法公布 2 大日本婦人会創立 4 米機日本本土初空襲（東京・名古屋・神戸） 6 ミッドウェー海戦大敗北、戦局の転機となる 7 大本営、南太平洋侵攻作戦の中止を決定 12 ガダルカナル島撤退決定</p>
<p>一九四三</p>	<p>一八年</p> <p>1 吉野村健康保険組合設立 7 西多摩地方事務所開庁 7 吉野村区长制を廃し、部落会隣組制度を設ける 7 霞村森林組合設立 8 霞村薪炭生産組合設立 10 小河内貯水池工事中止 ※この年、小曾木村診療所建設 青梅町役場庁舎新築</p>	<p>5 アッツ島日本守備隊全滅 7 東京都制実施 9 イタリア連合国に降伏 9 上野動物園の猛獣薬殺される 12 学徒出陣はじまる</p>
<p>一九四四</p>	<p>一九年</p> <p>2 御岳登山鉄道営業中止 4 各村農会と信用組合を統合して農業会を設立 4 霞村区长制を廃し部落会を設置 4 「稿本三田村史」刊行 7 御岳、氷川間の奥多摩鉄道開通し、青梅電鉄とともに国有鉄道となる 8 各町村へ学童多数疎開 9 大倉</p>	<p>6 マリアナ沖海戦で空母の大半を失う 6 父島・硫黄島に敵機初来襲 7 米軍サイパン島占領 7 学童疎開はじまる 8 学徒勤労令公布 10 神風特別攻撃隊編成される 11 B 29 東京初空襲、以後大規模爆撃続く ※この年、日本経済は急速に崩</p>

	<p>集古館及び浅草寺の国宝、沢井雲慶院に疎開 ※この年、武陽銀行は埼玉銀行青梅支店となる 成木村診療所設立 都立種畜場開設 各町村への 一般疎開者多数 勤労奉仕、供出一段ときびしく なる</p>	<p>壊の一途をたどる</p>
<p>一九四五 二〇年</p>	<p>2 米軍艦載機により東青梅駅停車中の電車機銃掃 射を受ける 3 霞村国民義勇隊発足 4 B 29 柚木 の山林に墮落 4 平溝に爆弾落下し五名死亡 5 調 布村農業会設立 6 三田村国民義勇隊発足 9 各 町村内の学童疎開引上げる 10 米軍騎兵第一師団 青梅町役場等に駐留する(十二月十日まで) 11 霞村婦人会新発足 12 三田村診療所を開設 12 川合玉堂沢井横尾に転居 ※この年、成木村営 バスを運行 各町村食糧増産に腐心する</p>	<p>3 硫黄島の日本軍全滅 3 5 東京夜間焼夷弾攻 撃で廃墟となる 5 ドイツ無条件降伏 6 米軍沖 縄占領 6 国際連合設立 8 広島、長崎に原爆投 下 8 ソ連対日参戦 8 日本無条件降伏 10 GH Q 政治犯釈放、特攻警察・治安維持法・治安警察 法廃止 11 日本社会党・日本自由党・日本進歩党 結成 11 GHQ 財閥資産凍結、解体 12 日本共産 党再建 12 選挙法改正 12 農地調整法改正公布 (第一次農地改革)</p>
<p>一九四六 二二年</p>	<p>1 三田村婦人会設立 2 ともしび演劇サークル設 立 2 三田村青年団結成 3 霞村家庭教育指定村 として都から指定される 3 三田村健康保険組合 業務休止 6 小曾木郵便局開局 9 霞村母親学級 開設 10 生活保護法により各町村方面委員を廃し 民生委員を委嘱 10 各町村に農地委員会、選挙管 理委員会を設置 11 奥多摩溪谷駅伝競走大会再開</p>	<p>1 GHQ 戦争協力者の追放を指令 2 金融緊急措 置令公布 5 極東国際軍事裁判はじまる 5 復活 第一回メーデー開かれる 7 ソ連抑留邦人引き揚 げ開始 8 日本労働組合総同盟結成 8 全日本産 業別労働組合会議結成 10 自作農創設特別措置法 等公布(第二次農地改革) 11 日本国憲法公布</p>

一九四八	一三三年	<p>2 三田村農業協同組合設立 3 三町村（青梅、調布、霞）組合立消防署発足 3 青梅町公安委員会設置 3 青梅警察署発足 4 天皇、皇后永山公園植樹祭に臨席 4 青梅町商工振興会設立、調布村農業協同組合設立、小河内貯水池工事再開 5 成木村農業協同組合設立 6 霞村農業協同組合、霞村共済組合設立 7 御岳キャンプ場再開 8 青梅町衛生会解散 10 東京都教育委員選挙執行 11 小曾木村国民健康保険組合発足 11 青梅町民運動会開催 11 農業調整委員選挙 ※この年、吉野村農</p>	<p>2 新警察制度発足（国家地方警察、自治体警察、国家公安委員会設置） 3 民主自由党結成 4 G HQ 祝祭日の国旗掲揚を許可 5 夏時間実施 7 教育委員会法公布 10 極東国際軍事裁判判決 12 経済安定九原則発表</p>
一九四七	一三二年	<p>1 公職追放各町村に及ぶ 各町村の常会・部落会、隣組制度廃止される 2 三田村国民学校焼失 3 都立青梅図書館開館 3 各町村学務委員、青年学校廃止 4 各部落回覧制度廃止され、掲示板を新設 4 都知事、町村長、参議院議員、衆議院議員、都議会議員、町村会議員選挙行なわれる 7 青梅町社会人対抗卓球大会開催 9 台風により多摩川洪水、家屋等倒壊する 10 12 各町村警防団を消防団と改組 ※この年、都立誠明学園を新町に設立 各校PTAを創立 岩蔵の亜炭採掘再開 小曾木農業協同組合設立 青梅町衛生会設立</p>	<p>1 学校給食開始 2 八高線列車転覆 3 民主党結成 3 学校教育法・教育基本法・教育委員会法公布 4 六・三制実施、国民学校を小学校と改称 5 日本国憲法施行 5 第一回国会開会 6 片山内閣設立 11 農業協同組合法公布</p>
		<p>される 11 塩船観音寺本堂阿弥陀堂、仁王門重要文化財に指定される 都立青梅保育園開園</p>	

	一九四九 二四年	<p>業協同組合設立 吉野村診療所完成 成木村農業 共済組合設立 成木村養蚕農業協同組合設立 各 町村農地委員会農地買収売渡を行なう 各町村中 学校校舎完成 上長淵保育園開園</p> <p>1 霞村健康保険診療所開設 2 青梅町郷土誌編纂 会結成 4 奥多摩ハーモニークラブ結成 8 都営 バス青梅↷荻窪間運転開始 10 吉野村公民館完成</p>	<p>1 日本学術会議発足 1 法隆寺金堂焼失 1 全労 連世界労連へ加入 3 ドツヂライン発表 7 下山 事件・三鷹事件発生 8 松川事件発生 8 シャウ プ税制改革勧告 11 湯川博士ノーベル賞受賞</p>
一九五〇	二五年	<p>1 第一回青梅町成人式開催 5 青梅町公民館開館 7 青梅町広報創刊 8 奥多摩火葬場組合（青梅、 調布、霞）設立 ※この年、河辺・千ヶ瀬・友田 ・三田・小曾木・都立霞保育園開園</p>	<p>3 自由党結成 6 朝鮮戦争おこる 6 G H Q 共産 党幹部追放 7 金閣寺焼失 7 日本労働組合総評 議会結成</p>
一九五一	二六年	<p>2 青梅町・調布村・霞村、市政施行可決 2 西多 摩郷土研究会発足 4 青梅市誕生 4 青梅第二小 学校（現四小）創立 4 市長、市議会議員選挙 5 三田村成人学級開設 5 宮の平住居跡発見され る 5 第一回青梅市赤ちゃんコンクール 5 第一 回市議会定例会開催 6 「西多摩郷土研究」創刊 号発行 7 青梅市農業委員会選挙 9 「青梅市広 報」創刊号発行 10 「青梅市展望」発行 10 青梅 市体育協会設立 10 青梅市福祉事務所開設 11 第 一回市民運動会開催</p>	<p>3 農業委員会法発布 4 食糧公団廃止、民営米屋 発足 8 民間放送開始 9 サンフランシスコ講和 条約、日米安全保障条約調印</p>

青梅市内の平和像紹介



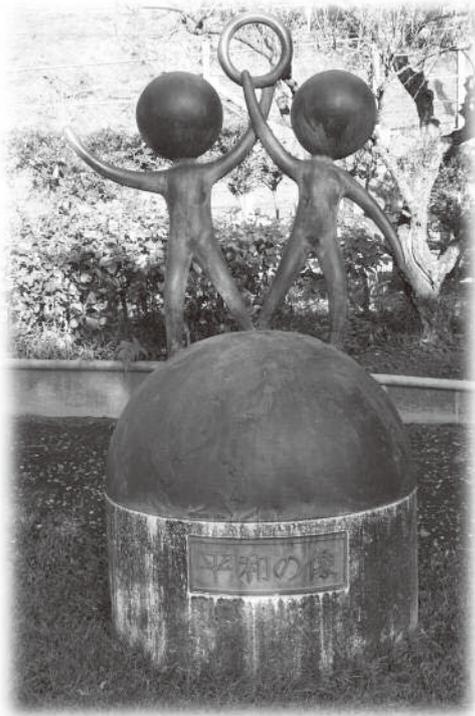
「平和」(制作：松野伍秀氏)
1961年4月5日青梅市役所設置



「平和のよろこび」
世界連邦建設同盟青梅支部設立30周年記念(制作：尾形喜代治氏)
1989年10月31日 河辺駅北口設置



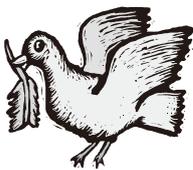
「平和像」
世界連邦建設同盟青梅支部設立20周年記念(制作：松野伍秀氏)
1979年10月18日 青梅駅前設置



「平和の像」
 青梅市立西中学校の生徒のアイデアを
 参考に制作
 1995年石神前駅設置



「平和」
 戦後50年を記念し地域の皆様に御協力
 いただいたアイデアを参考に制作
 1995年 宮ノ平駅前設置



「ここから世界へ」(制作：八島久恵氏)
 1994年3月30日 沢井駅前設置



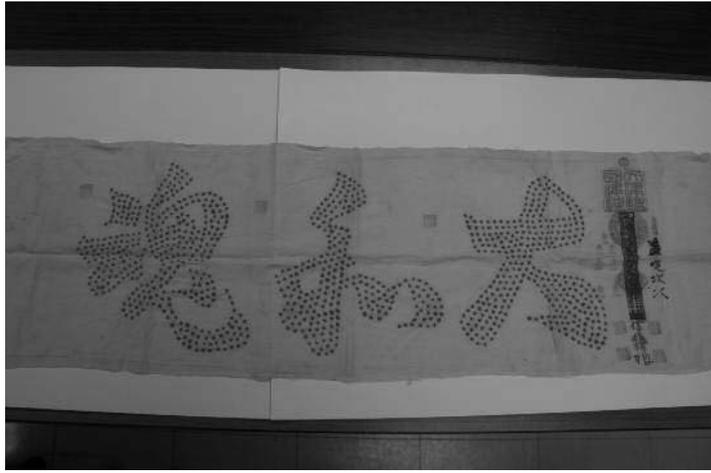
軍帽



飯盒



水筒



千人針



奉公袋 (裏)



奉公袋 (表)



風呂敷



愛国ゆたんぼ (陶器製)



防毒マスク



メガホン



弾丸入れ



鉄兜



墜落した飛龍の部品



防衛食容器（戦時中の缶詰代用品）



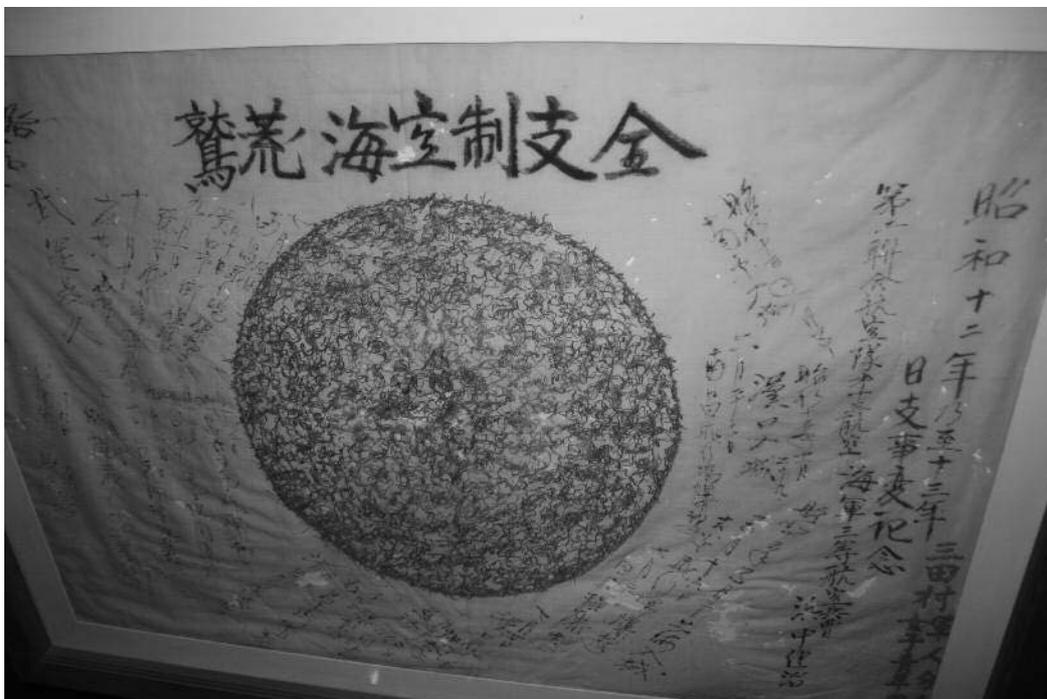
ラッパ



防空頭巾（子供用）



防空頭巾（警防団）



千人針



警防団半纏



警防団制服



軍服



軍服



墜落した B29 のエンジンの一部

昭和20（1945）年、吉野村（現在の青梅市柚木町）の山林に墜落した B29 爆撃機のエンジンの一部です。

日本側の記録によると、昭和20（1945）年4月2日未明に北多摩地区が空襲を受けたが、午前3時12分頃、柚木の山林に B29 が1機墜落したとあります。その際、墜落の直前に4基あるエンジンのうち、1基が脱落し、多摩川に落ちたと当時の目撃者は語っています。

このエンジンは、その後、放置されたままでしたが、昭和54（1979）年に地元の方達により引き上げられ、保管されました。



墜落した「飛龍」のエンジン

昭和20年8月11日の夕刻、大日本帝国陸軍の重爆撃機「飛龍」が吉野村柚木（現在の青梅市柚木町）の山中に墜落しました。終戦4日前のことです。墜落機は埼玉県熊谷の第1航空軍、第16独立飛行隊に所属していました。

当日は、静岡県浜松飛行場での事故機の支援任務を終え、傷病兵2名を乗せて熊谷に帰還する途中、何らかのトラブルにより墜落したものと推測されます。

墜落した場所は、愛宕山尾根の東端付近で、梅ノ木峠と三ツ沢峠をつなぐ稜線の北側斜面です。

平成16年1月18日に多くの方々の献身的な努力によって、急峻な谷底から100キロを超えるエンジンの一部が搬出されました。

三菱四式爆撃機「飛龍」(キ67)

高 度	7,000m
行動半径	1,000km
最大速度	550km/時
乗 員	6名～7名
爆弾装置	500kg
全 長	18.7m
全 幅	22.5m
上昇力	6,000m/14分30秒

青梅市は、平和な世界を求めるため、世界連邦平和都市宣言と非核平和都市宣言を行っています。ここに、両宣言を紹介します。

世界連邦平和都市宣言

青梅市は日本国憲法を貫く平和精神のもとづいて、世界連邦建設の趣旨に賛同し、全人類の恒久平和と福祉増進に努力することを決意し、ここに平和都市たることを宣言する。

昭和33年4月5日議決

世界連邦平和都市宣言決議

第2次世界大戦において原子爆弾の洗礼を受けた我が国が、率先戦争の災禍を防ぎ、恒久平和を樹立するために努力すべきは、憲法にも示されるとおり当然の責務である。

この大目的達成の手段として、あるいは国際連合の組織変更、あるいはその他の新たな組織によって各国の武力を廃し、連邦を形成して地球を一つの世界とする運動即ち世界連邦建設同盟に市を挙げて賛意を表し、国内はもちろん国外の平和宣言都市と相結んで国家宣言にまで国民の総意を盛りあげ、以って最終の目的を達成せしめようとするにある。

青梅市非核平和都市宣言

国際連合において安全保障理事会の改革が進められようとし、日本が世界の中で平和の達成のために積極的な役割を担おうとしている今、一方で、核不拡散条約からの脱退の宣言と核兵器保有を発言する国があり、核の脅威は去っていない。

青梅市は、世界唯一の核被爆国である日本の一都市として、これまで、世界連邦運動協会と一体となって、平和事業の推進に取り組んできた。

ここに、戦後60年を迎えるに当たり、平和の誓いを新たにし、この世界が核兵器や戦争のない平和な世界となるように念願し、非核平和都市となることを宣言する。

宣言文

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

私たちは、世界唯一の核被爆国の市民として、日本国憲法の平和の精神を守り、平和を愛する世界の人々と手を携えて、核兵器や戦争のない平和な世界の実現を願い、努力してきました。

しかし、核兵器の拡大拡散の脅威はなくなり、世界の各地で武力紛争や戦争が絶え間なく続き、平和とは程遠い様相を呈しています。

青梅市は、戦後60年を迎えるに当たり、平和の誓いを新たにし、この世界が核兵器や戦争のない平和な世界となることを願い、ここに非核平和都市となることを宣言します。

平成17年7月19日

あとがき

平成二十七年は戦後七十年という節目の年でした。青梅市では、この機会をとらえ戦争の悲惨さや平和の尊さを考え、後世に伝えるため、戦争を体験した市民の方々から御寄稿いただいた体験談を本冊子にまとめました。御寄稿いただいた方々に深く御礼申し上げます。

また、青梅市・羽村市共同事業である「青梅・羽村ピースメッセンジャー」において、広島で中学生に被爆体験をお話しいただいた岡ヨシエ様、青梅市平和講演会において、東京大空襲で親族を亡くされた体験をお話しいただいた海老名香葉子様にも、多大なる御協力をいただきました。

なお、巻末には、青梅市内に設置されている平和像と青梅市郷土博物館に収蔵されている戦争関連の収蔵品の一部を紹介させていただきました。

戦後生まれが八割以上を占める現在、戦争での悲惨な体験を知る機会がますます少なくなってきました。この体験集が多くの人に読まれ、戦争の悲惨さを未来へ伝え、平和な世界を築く一助となることを願います。

なお、編集に当たり、御寄稿いただいた皆様の御了解のもと、原文の意図を損なわない範囲で一部加筆修正したことを申し添えます。

戦後七十年 未来に語り継ぐ私たちの体験
～平和への祈り～

- ・平成28年3月発行
- ・発行・編集 青梅市役所秘書広報課
青梅市東青梅1-11-1
電話 0428-22-1111
- ・印刷 株式会社 成和印刷

戦後七十年 未来に語り継ぐ私たちの体験
く平和への祈りく

表紙の写真

上から「鉄兜」、「防空頭巾」、「防毒マスク」

(青梅市郷土博物館収蔵)